

# 水郷潮来 観光ガイドマニュアル



水郷潮来観光ボランティア連絡協議会



## 第二版発刊によせて

本書の初版は令和2年7月に発行された。爾来4年8ヶ月有余の歳月を経て、このたび新たにガイド項目の続編追加を主体に、初版の文言整理・統一等の若干の整合性を図り第二版を完成させた。

### 初版と第二版の相違点と特徴は

1. 初版は観光資源の単発的な紹介に留まったものの、第二版ではガイドコースの道なり道に沿って点在する観光名所とウォーキングも併せて楽しめるコース設定とした。
2. 初版は潮来市の置かれている位置づけや知名度のある文化行事や観光資源の紹介に偏りがちであったが、第二版では隠れた名所や今後脚光を浴びるであろう新規観光資源も紹介した。
3. 初版はあやめ園周りを主体とした小範囲地域限定的であったが、周辺地域にも拡大した。
4. 歴史や文化に精通し先輩諸氏の記事や考えを参考に文献を紐解き、足らざるを加筆修正した。

これら上記の1～4を加筆改訂する事で初版マニュアル目次紹介の見出しを、12項目から26項目に増加させ、内容を充実させた改訂増補版となっている。伝統と文化に培われた潮来を紹介するガイド担当者として本書を折に触れ愛読し、ガイド時のバイブルとして活用していただきたい。

ガイドがこれぞガイドと言われんが為には基礎的な知識が要るのは言うまでもない。その為の教材となるのが本書だと言える。本書は系統的に整然とまとめられた観光の知的財産だと言っても決して過言ではない。だが折に触れ目を通し、愛読し、要点は精読し記憶に留めなければならない最低限の宿命を負うのも又事実である。ガイドは郷土の魅力を再発見し、市民が誇りに思える伝統と文化、更には観光資源を紹介する事である。幸い潮来市は鹿行5市にあっても、かつてより文化の香り高い街として定説があり、紹介すべき観光名所は事欠かない。

知的財産をフル活用し、これをガイド現場で駆使し、来訪者に喜んでもらう！お客さんが説明に頷き、名所旧跡を堪能し、感動し、納得し目を輝かせる！ガイド担当者にとって、まさにガイド冥利に尽きるひと時である。この味わいを持つ経験者の一人でも多からん事を願って止みません。

### ガイドを担う者が具備すべき条件はなんだろうか？

既に茨城県では数年前から県内の観光行事や観光資源を幅広く紹介した教材を発行し、一定の学識を認定された者には観光マイスターの称号を贈り、更に観光マイスター有資格者の中から観光現地で実際の案内を想定した実技の認定者にはマイスターS級の称号を贈っている。県のこの制度は他県に類例を見ない力の入れようである。本第二版は認定取得にも寄与する貴重な教材と言えます。

### この制度を県ではなく潮来市に置き換えて見ればどうだろう？

- ・教材はこの度、第二版が完成し、初版に比べほぼ全ての観光領域を網羅し、質・量共に向上した。後は折にふれ目を通す機会を意図的に増やし、記憶の片隅に留める習慣をつける。
- ・現地訓練（On the job Training）を精通したガイドに積極的に同行して観光現地に場慣れする。
- ・観光現地での説明と紹介は、ガイド当人のキャラクター（方言、ユーモア、ジョーク、身振り手振り等）を発揮しつつ、自らも楽しむ。

『為せば成る、為さねば成らぬ何事も、成らぬは人の為さぬなりけり』です。まずはモチベーション高く参加する事がスタートだと考えます。今回、同時に『ウォーキングコースガイド』初版も発行しました。本書と併読頂き最近の健康志向の高まりでウォーキングを愉しむのも一興かと思います。

最後に本書の刊行に当たり会員諸氏の大変なご協力をいただいた。ある時は酷暑の中を歩き、又ある時は寒風吹き付ける時があった。手分けして時間測定、写真撮り、最適コースを選定した。

特定役員にあってはメディアを駆使し、文献を紐解き、地域住民に尋ね、造詣豊かな人の助言を受け文書を構成し、その成否を諮問した。市の観光商工課にあっては、文書の試し刷りや勉強会の支援等を頂戴した。関係者には改めて敬意を表し感謝を申し上げご挨拶と致します。

令和7年3月吉日  
水郷潮来観光ボランティア連絡協議会  
会長 観音堂 朋実

## 水郷潮来観光ガイドマニュアル 目次

|                          |       |
|--------------------------|-------|
| 1. 潮来の由来と歴史              | 1～2   |
| (1) 潮来の歴史と名称の由来          |       |
| (2) 前川の東北藩の河岸の歴史と潮来の発展   |       |
| (3) 潮来の名産品               |       |
| 2. 水郷潮来あやめ祭り             | 3～6   |
| (1) あやめ園とあやめ祭りの歴史        |       |
| (2) アヤメ、カキツバタ、花菖蒲の見分け方   |       |
| (3) 嫁入り舟                 |       |
| (4) 十二橋めぐり               |       |
| 3. 長勝寺                   | 7～10  |
| (1) 歴史                   |       |
| (2) 山門                   |       |
| (3) 仏殿                   |       |
| (4) 銅鐘                   |       |
| (5) 阿弥陀仏三尊               |       |
| (6) 方丈・書院・庫裡・隠寮          |       |
| (7) 禅宗様建築                |       |
| (8) 芭蕉句碑                 |       |
| (9) 春の桜、秋の紅葉、2月の梅、6月の菩提樹 |       |
| 4. 水郷旧家「磯山邸」             | 11    |
| (1) 磯山邸の建築の特徴            |       |
| (2) 現在の使われ方              |       |
| 5. 前川河岸史跡                | 12～13 |
| (1) 津軽河岸の歴史              |       |
| (2) 大門河岸                 |       |
| (3) 上米（城米）河岸             |       |
| (4) 天王河岸                 |       |
| (5) 仙台河岸                 |       |
| 6. 宮本茶村                  | 14～15 |
| (1) 宮本茶村の歴史と功績           |       |
| (2) 延方郷校と潮来郷校            |       |
| 7. 本間自準亭跡                | 16    |
| (1) 本間道悦                 |       |
| (2) 松尾芭蕉 鹿島紀行との関係        |       |
| 8. 素鷲熊野神社                | 17    |
| (1) 歴史                   |       |
| (2) 潮来祇園祭り               |       |
| (3) 大櫓（オオケヤキ）（県指定文化財）    |       |

|                                |       |
|--------------------------------|-------|
| 9. 稲荷山公園                       | 18～19 |
| (1) 稲荷山の発足経緯と概要                |       |
| (2) 野口雨情の石碑                    |       |
| (3) 稲荷山古墳群                     |       |
| 10. 二本松寺（あじさいの杜）               | 20～21 |
| (1) 二本松寺の歴史                    |       |
| (2) 『あじさいの杜』                   |       |
| 11. 島崎城史跡                      | 22～23 |
| (1) 城址と中世の潮来                   |       |
| (2) 島崎城                        |       |
| (3) 大台城                        |       |
| (4) 島崎氏は400年もの長い間に渡ってなぜ生き抜けたか？ |       |
| 12. 大生神社、大生古墳群                 | 24～28 |
| (1) 大生神社の創建とその経緯               |       |
| (2) 大生神社例大祭                    |       |
| (3) 物忌乗輿                       |       |
| (4) 大生古墳群とは                    |       |
| (5) 大生西部古墳群の分布                 |       |
| (6) 箱式石棺の人骨                    |       |
| (7) 副葬品、出土品                    |       |
| 13. 鹿嶋吉田神社                     | 29    |
| 14. 水郷県民の森                     | 30～31 |
| (1) ビジターセンター                   |       |
| (2) 大膳池・吊橋                     |       |
| (3) 野外活動広場                     |       |
| (4) 活動体験施設                     |       |
| (5) 大生古墳群                      |       |
| 15. 権現山公園・三熊野神社・水郷北斎公園         | 32～33 |
| (1) 権現山公園                      |       |
| (2) 三熊野神社                      |       |
| (3) 水郷北斎公園                     |       |
| 16. 長国寺・松原神社・諏訪神社              | 34～35 |
| (1) 長国寺                        |       |
| (2) 松原神社                       |       |
| (3) 諏訪神社                       |       |
| 17. 慈母観音・万葉歌碑・所家住宅             | 36～37 |
| (1) 慈母観音                       |       |
| (2) 万葉歌碑                       |       |
| (3) 所家住宅                       |       |

|  |       |
|--|-------|
| 18. 道の駅いたこ・水郷潮来ソーラー・前川運動公園・水郷潮来バスターミナル | 38～39 |
| (1) 道の駅いたこ                             |       |
| (2) 水郷潮来ソーラー                           |       |
| (3) 前川運動公園                             |       |
| (4) 水郷潮来バスターミナル                        |       |
| 19. 浄国寺・西円寺・恵雲寺・天王河岸・自準亭跡              | 40～41 |
| (1) 浄国寺                                |       |
| (2) 西円寺                                |       |
| (3) 恵雲寺                                |       |
| (4) 天王河岸                               |       |
| (5) 自準亭跡                               |       |
| 20. 硯宮神社・二十三夜尊堂・愛友酒造                   | 42～43 |
| (1) 硯宮神社                               |       |
| (2) 二十三夜尊堂                             |       |
| (3) 愛友酒造                               |       |
| 21. 愛染院根本寺・白鳥の里                        | 44～45 |
| (1) 愛染院根本寺                             |       |
| (2) 白鳥の里                               |       |
| 22. 普門院・地藏河岸の常夜燈                       | 46～47 |
| (1) 普門院                                |       |
| (2) 地藏河岸の常夜燈                           |       |
| 23. 妙光寺・文殊院                            | 48～49 |
| (1) 妙光寺                                |       |
| (2) 文殊院                                |       |
| 24. 観音寺・国神神社・浅間塚古墳                     | 50～51 |
| (1) 観音寺                                |       |
| (2) 国神神社                               |       |
| (3) 浅間塚古墳                              |       |
| 25. 水郷トンボ公園・市立ボートセンターあめんぼ              | 52    |
| (1) 水郷トンボ公園                            |       |
| (2) 市立ボートセンターあめんぼ                      |       |
| 26. 長山(永山)城跡・日吉山王神社・金刀比羅神社・かすみの郷公園     | 53～54 |
| (1) 長山(永山)城跡                           |       |
| (2) 日吉山王神社                             |       |
| (3) 金刀比羅神社                             |       |
| (4) かすみの郷公園                            |       |

初版発行：令和2年7月

II版発行：令和7年3月

## 1. 潮来の由来と歴史

### (1) 潮来の歴史と名称の由来

大化の改新（645年）後、地方の行政区分として郡、郷、里が設けられ、『和名抄』によれば行方郡は17の郷から構成されていました。潮来市内の地域を当時の郷にあてはめると、香澄郷（永山・清水・牛堀・上戸）、八代郷（茂木・堀之内・島須・築地）、板来郷（潮来・辻）、大生郷（延方・水原・釜谷・大生）、逢賀郷（大賀）になるといわれています。この地方制度は中世に若干の変動はありましたが、潮来市成立前の旧町村の原型になっています。

その昔、地名を「伊多来」あるいは常陸風土記には「板来」と記載され、古くから海運と陸路の要所として栄えた所です。大化の改新の頃、国府（今の石岡市）から鹿島神宮への陸路の駅「板来の駅（いたくのうまや）」が置かれ、交通の要所で、それは中世から近世を通して変わらない地域的な特性でもありました。元禄年間に徳川光圀が「鹿島の潮宮（いたのみや）」にあやかって「潮来」と改め現在に至っています。

近世になると、奥州諸藩の物資運搬のため、後述の内川廻りと、「千石舟」で銚子河口から利根川を上り潮来の前川に運び、潮来で1～2反帆の高瀬舟に積み替えを行い、江戸へ輸送する中継地として潮来は大いに繁盛していました。しかし、繁盛したのは江戸中期ごろまでで、利根川の流れが変わり、中継基地としての機能を失い、明治に入ると常磐線が開通し陸運が盛んになり、水運は一挙に衰退し、潮来も寂れていきました。

それ以来潮来は産業らしき産業がなかったことから、その対策として、水郷観光の案内役として地元の若い娘さんを「さっぱ舟」の船頭に登用したところ非常に好評で、「娘船頭さん」として知られるようになりました。昭和30年には、美空ひばり主演の「娘船頭さん」の映画ロケが潮来で行われ、その放映で知名度が高まりました。またこの地方は周囲を水に囲まれた水郷地帯で水路が縦横に張り巡らされており、「さっぱ舟」は日常生活の交通の便、農作業時の農具や牛等の運搬に利用され、嫁入り時の花嫁、嫁入り道具等の運搬も「さっぱ舟」が使われました。この「嫁入り舟」は昭和31年松竹映画「花嫁募集中」とタイアップし、ミス花嫁を募集したことがきっかけとなり、花村菊江さんが歌った「潮来花嫁さん」の大ヒットにより、一躍全国に知られるようになりました。

### (2) 前川の東北藩の河岸の歴史と潮来の発展

江戸幕府が成立すると寛文期（1661～72年）から元禄期（1688～1703年）には、東北諸藩の年貢米や諸物資が内川廻り潮来経由で江戸に回漕されるようになりました。当時、大量の物資を輸送するのに、水上輸送が陸上輸送よりも便利で、運賃も安かったからです。

そのため、潮来の前川筋には仙台藩や津軽藩などの蔵屋敷が設けられ、潮来は遊郭も営業し、港町、行楽地として繁栄しました。その結果、貞享元年（1684年）には潮来に8軒の遊郭が存在し、水戸藩が御用金制度を始めた元禄13年（1700年）には、水戸藩の御用金の30%を潮来が占めるまでの経済的な発展が進みました。

### (3) 潮来の名産品

- ①「あやめ笠」：い草が原材料。古くから農作業には欠かせない必需品で、日よけや雨よけの農具、悪事災難を避け常に身をまもる笠として大切にされてきました。  
平成8年「茨城県郷土工芸品」指定。
- ②「まこも」：イネ科マコモ属・多年草の水生植物。水稲と同じような管理をすると、その若茎に黒穂菌（くろぼきん）が寄生して肥大化、茎の根元の部分が竹の子状になります。この株の部分20cmほどを『まこもだけ』といい、ここを収穫し食用にします。味は無味無臭。ほのかに甘味があり、油との相性が良いため中華料理に多く使用されます。繊維質やたんぱく質、ビタミン、カリウム等を含む健康食品で、食感はずけのことアスパラガスの中間位の柔らかさです。
- ③米：特別栽培米「潮来あやめちゃん」（皇室への御献上米：平成24年新嘗祭にて献上）  
平成20年3月商標登録、「茨城の誇るコシヒカリシリーズ」8銘柄選定。牛糞堆肥を使用することで、化学肥料や化学合成農薬を従来法で栽培するお米の1/2以下に削減した、安心安全なお米。茨城県「特別栽培農産物認証」、生産者全員が「エコファーマ

一」の認定を受けています。現在3つの商品（箱入り娘：食味値85以上、ふっくら娘：食味値80～85、はっちゃき娘：食味値：75～79）が販売されています。  
：極早生品種「一番星」

平成25年に初出荷。大粒で、モチモチした食感が特徴です。冷めてからも美味しさは変わらず、おにぎりにも最適。8月中旬には新米を味わうことができます。食味値：76以上

- ④米粉製品：虹どら、お米ぼうむ、米粉まんじゅう、花嫁のわたぼうし、米粉麵（モット・フォー）等が「道の駅いたこ」で販売されています。
- ⑤乳製品：飲むヨーグルトが「道の駅いたこ」で販売されています。
- ⑥米菓：「手焼せんべい にしくら」、「手焼せんべい つか本（健次郎焼）」、「たがねや」、「荒井屋北斎手焼きせんべい」等。
- ⑦銘菓：「献上菓舗さわた」笹葉舟、水しずか、あやめサブレ  
「お菓子のおざわ」天然酵母パン、いちご大福、はなしょうぶサブレ
- ⑧漬物：「和泉屋本店」ごぼう漬け・てっぽう漬け
- ⑨佃煮：すずめ焼き「立原商店」、「はしもと」、「増田川魚店」等で販売されています。  
わかさぎ、しらうお、ごろ、うなぎ、はぜ、えび等を独自のタレで煮上げた『佃煮』や、塩ゆでした後に天日干しをした『煮干し』があります。また『すずめ焼き』は、小鮎やタナゴ等を串刺しにしてタレを使い炭火などで焼き上げています。
- ⑩酒：「愛友酒造」文化元年（1804年）創業の老舗で、鹿行地域で唯一の酒蔵。  
自慢の大吟醸は、茨城県知事賞をはじめ、関東信越国税局優秀賞、全国新酒鑑評会金賞、モンドセレクション最高金賞など、数々の賞を受賞。その他、あやめ花酵母をつかったお酒「水郷潮来あやめまつり」など。酒蔵見学可能。（※あやめ花酵母は、「水郷潮来あやめ園」に咲くハナショウブから作られています。）

## 2. 水郷潮来あやめ祭り

### (1) あやめ園とあやめ祭りの歴史

戦前まで水郷潮来は、あやめ園をはじめとして潮来十二橋など水郷情緒を楽しめる観光地として賑わっていました。しかし、第二次世界大戦中には、あやめ園は水田と化し、旅館も疎開学童の宿舎とされるなど、観光地としての姿を失ってしまいました。

戦後、荒廃したあやめ園は、昭和25年(1950年)寄付によって花菖蒲の苗を購入し、復興へ歩みを始めました。再び観光客も戻り始めましたが、地元ではより発展をめざして国立公園の指定を目標に期成同盟を結成し、国会への請願などの運動が始まりました。運動と並行して、あやめはもとより柳やポプラ、桜を数千本植樹するなど、公園としての環境整備を進めました。昭和34年3月3日に「水郷国定公園」が全国20番目の国定公園として指定されました。(その後筑波山等を加え昭和44年水郷筑波国定公園となりました。)昭和31年に前川の旧水雲橋の近く(潮来ホテル前)に町と鹿島参宮鉄道(現関東鉄道(株))とであやめ園が開園され、昭和51年からは当時の潮来町の管理となり現在に至っています。現在では約1.3haの敷地に約500種、100万株の色とりどりのあやめが咲き誇る景勝地となっています。

あやめ祭りは昭和27年(1952年)に始まった歴史ある祭りで、当初は愛好家たちがビール瓶などに花菖蒲やアヤメの切り花を入れたり、鉢植えを持ち寄って行われていました。その後あやめ園が開園し整備が進み磯山邸、津軽河岸等も整備されました。



あやめ祭りの風景

開花に合わせ毎年5月下旬から6月下旬にかけて開催され、期間中は昭和35年(1960年)に花村菊江の「潮来花嫁さん」にちなんだ「嫁入り舟」や伝統芸能の「あやめ踊り」などさまざまなイベントが行われます。夜には園内がライトアップされ、昼間とは違った幻想的な雰囲気を楽しむことができます。また、昔は人々の足として使われていた「ろ船」も運行し、水郷地帯を流れる前川で遊覧を楽しむこともでき、毎年期間中に多くの観光客が訪れています。(各種イベントは毎日ではないので確認を要します。)

### (2) アヤメ、カキツバタ、花菖蒲の説明

#### ①アヤメ

アヤメは山野の草地に生えます。葉は直立し高さ40～60cm程度。5月ごろに径8cmほどの主に紫色の花を付けます。外花被片(前面に垂れ下がった花びら)には網目(虎斑)模様があるのが特徴で、本種の和名のもとになっています。花茎は分岐しません。

北海道から九州まで広く分布します。古くは「あやめ」の名はサトイモ科のショウブを指した語で、現在のアヤメは「はなあやめ」と呼ばれました。なお、「いずれがアヤメかカキツバタ」という慣用句があります。どれも素晴らしく甲乙付け難いという意味ではありますが、見分けが付き難いという意味にも用いられます。

#### ②カキツバタ

カキツバタは湿地に群生し、5月から6月にかけて主に紫色の花を付けます。内花被片が細く直立し、外花被片の中央部に白い線状の斑紋があることなどを特徴とします。江戸時代の前半にはすでに多くの品種が成立しており、古典園芸植物の一つでもあります。江戸時代後半には花菖蒲が非常に発展して、カキツバタはあまり注目されませんでした。現代では再び品種改良が進められています。

漢字表記の一つ「杜若」は、本来はヤブミョウガという別種の漢名(「とじゃく」と読む)でしたが、カキツバタと混同されたものです。

#### ③花菖蒲

花菖蒲はノハナショウブの園芸種です。6月ごろに花を咲かせます。花の色は白、ピンク、紫、青、黄など多数あり、絞りや覆輪などとの組み合わせを含めると5,000種類あるといわれています。外花被片の中央部に黄色の斑紋があり、大別すると江戸系、肥後系、伊勢系の3系統に

分類でき、他にも原種の特徴を強く残す山形県長井市で伝えられてきた永井古種があります。近年の考察では、おそらく東北地方でノハナショウブの色変わり種が選抜され、戦国時代か江戸時代初めまでに栽培品種化したものとされています。これが江戸時代に持ち込まれ、後の三系統につながりました。長井古種は江戸に持ち込まれる以前の原型を留めたものと考えられています。

その他、特にアメリカで育種が進んでいる外国系があります。菖蒲湯に使われるショウブは、ショウブ科またはサトイモ科に分類される別種の植物です。



アヤメ



カキツバタ



花菖蒲

#### アヤメ、カキツバタ、花菖蒲の見分け方

| 種別    | 花の色           | 葉     | 花の特徴                 | 適地      | 開花期        |
|-------|---------------|-------|----------------------|---------|------------|
| アヤメ   | 紫、まれに白        | 主脈不明瞭 | 外花被片に黄色い網目(虎斑)模様がある  | 乾いた所に育つ | 5月上旬から中旬   |
| カキツバタ | 青紫のほか紫、白等     | 主脈細小  | 外花被片に白ないし淡黄色の線状斑紋がある | 水中や湿った所 | 5月中旬から下旬   |
| 花菖蒲   | 白、紫、ピンク、水色、黄等 | 主脈太い  | 外花被片に黄色の線状斑紋がある      | 湿った所に育つ | 5月下旬から6月下旬 |

(参考) 花菖蒲の歴史的系統

#### ①江戸系

江戸では花菖蒲の栽培が盛んで、江戸中期頃に初の花菖蒲園が葛飾堀切に開かれ、浮世絵にも描かれた名所となりました。ここで特筆されるのは、旗本松平定朝(菖翁)です。60年間にわたり300近い品種を作出し名著「花菖培養録」を残し、花菖蒲栽培の歴史は菖翁以前と以後で区切られます。こうして江戸で完成された品種群が日本の栽培品種の基礎となりました。

#### ②肥後系

肥後熊本藩主細川斉護(なりもり)が、藩士を菖翁のところに弟子入りさせ、門外不出を条件に譲り受けたもので「肥後六花」の一つとなっています。菖翁との約束であった門外不出という会則を厳守してきましたが、大正時代にこれを売りに出した会員がおり、瞬間に中心的な存在になりました。ゆるぎない品格を備えた花は武士道精神の表れであり、まさに武士(もののふ)の花です。鉢で作り室内で鑑賞します。

#### ③伊勢系

伊勢松坂の紀州藩士吉井定五郎により独自に品種改良されたという品種群で「伊勢三品」の一つです。昭和27年(1952年)に「イセショウブ」の名称で三重県指定天然記念物となり、全国に知られるようになりました。垂れ咲きの三英花が特徴です。男性的な熊本花菖蒲に対して繊細な女性的な美しさに溢れています。

#### ④長井古種

山形県長井市で栽培されてきた品種群です。同市のあやめ公園は明治43年(1910年)に開園し、市民の憩いの場でありました。昭和37年(1962年)、来訪した中央の園芸家によって三系統いずれにも属さない品種群が確認され、長井古種と命名されたことから知られるよう

になりました。江戸後期からの品種改良の影響を受けていない、少なくとも江戸中期以前の原種に近いものと評価されています。長井古種に属する品種のうち13品種は長井市指定天然記念物です。

### (3) 嫁入り舟

嫁入り舟の歴史は江戸時代までさかのぼります。江戸時代水運の要衝であった潮来は水路によって形成された生活形態であったことから、嫁入りする際の花嫁や嫁入り道具を運搬するときにも、ろ舟が使われており昭和30年代前半まで続きました。

この嫁入り舟が全国的に知られるようになったのは、昭和31年10月に松竹映画「花嫁募集中」とタイアップして“ミス花嫁”を募集したことで、昭和35年に花村菊江さんの「潮来花嫁さん」の大ヒットにより多くの人に知られるようになりました。しかし、生活形態や交通手段（水運から陸運）の変化から河川や水路（江間）も姿を消してしまい、昭和30年代前半で「嫁入り舟」を見ることが出来なくなりました。

このような中、昭和60年に行われた「つくば国際科学技術博覧会（潮来の日）」の際に、イベントとして「嫁入り舟」を復活させたのがきっかけとなり、現在のあやめ祭りにおいても行われるようになり、今では水郷潮来を代表する行事となりました。

#### 【多くの見どころ！】

花嫁さんは、介添え役（主には花嫁の御両親）と磯山邸を出て津軽河岸で嫁入り舟に乗りあやめ園へと出発します。前川沿いでは橋や川の両側から沢山の人の祝福を受けながら進みます。北利根川の合流地点にある水門橋の手前でUターンし、ろ舟乗り場で花婿が花嫁を迎えます。ろ舟乗り場を出たところでお二人は、多くの観光客の皆様を迎えられ、あやめが咲き誇る中を長持ちを先頭にゆっくり東屋から雨情橋経由で花村菊江像の近くまで歩みます。花村菊江像横の土手で花嫁、花婿、介添え役の4人並んで祝福して頂いた皆様に黙礼をして記念撮影をします。多くの人たちに見送られ花嫁と花婿、介添え役のお二人夫々人力車に乗り磯山邸に戻ります。

嫁入り船津軽河岸出発～前川の嫁入り舟運行～あやめ園到着後のセレモニー～人力車出発まで約45分、見どころ満載で見事です。

花嫁に会えるまち、水郷潮来はきっと皆さまに幸せを感じて頂けると思います。

#### 【あやめ祭り期間中嫁入り舟開催日】

水曜日…11:00

土曜日…11:00、14:00、  
19:30（宵の嫁入り舟）

日曜日…11:00、14:00



あやめ祭り時の嫁入り舟

### (4) 十二橋めぐり

水郷地帯はかつては水路が縦横に張り巡らされており、人家と人家を行き来するためにひと一人がやっと通れるような小さな橋が架けられました。このような橋が12あったので十二橋と呼ばれていました。十二橋めぐりにはこのような小さな橋をめぐる「加藤洲十二橋めぐり」と歴史の新しい「前川十二橋めぐり」とがあります。さっぱ舟と呼ばれるろ舟に乗ってたつぷりと水郷情緒を味わうことが出来ます。

#### 【前川十二橋めぐり】

水郷潮来あやめ祭りの会場である、前川を運行します。前川十二橋の歴史は新しく昭和53年6月に遊覧船の運行が始まりました。一時休止をしていましたが昭和59年に水郷情緒の復活を求めた商工会青年部により、ろ舟運行が再開され、遠来の観光客はもとより地元の人たちにも人気となりました。前川十二橋は北利根川から順に前川水門橋、あやめ橋、雨情橋、思案橋、水雲橋、潮音橋、天王橋、出島橋、まこも橋、千石橋、上米橋、前川橋の名がつけられています。

【手漕ぎ舟前川十二橋めぐり運賃】

| コース | 大人           | 子供 (小学生)   |
|-----|--------------|------------|
| 30分 | 1人<br>1,300円 | 1人<br>700円 |

2024年料金改定 (税込み)

【エンジン付き舟前川十二橋めぐり運賃】

30分コース

4名まで一艘6,000円

5名以上1名1,500円

2024年料金改定 (税込み)



ろ舟前川十二橋めぐり

【加藤洲十二橋めぐり】

茨城県潮来市と千葉県香取市の県境を流れる常陸利根川の南岸にある加藤洲水門をくぐり細い水路を運行します。古くから水郷の名勝、定番の水郷観光スポットとして知られ、地区内を流れる新左衛門川の両側に並ぶ家と家を結ぶ一枚板の簡単な橋が12架かっていたので十二橋と呼ばれています。

【加藤洲十二橋めぐり運賃】 6月中は一方通行のためAコースのみ運行

| コース        | 個人4名まで       | 個人5名以上       |
|------------|--------------|--------------|
| A<br>(70分) | 1艘<br>8,000円 | 1名<br>2,000円 |
| C<br>(40分) | 1艘<br>6,800円 | 1名<br>1,700円 |

2024年料金改定 (税込み)



加藤洲十二橋めぐり

### 3. 長勝寺

#### (1) 歴史

源頼朝が文治元年（1185年）鹿島に隣接するこの地に武運長久を祈願して創建したと伝えられています。臨済宗妙心寺派に属し海雲山と号します。本尊は阿弥陀如来で、銅鐘は国の重要文化財です。北条高時が銅鐘を寄進した名刹の長勝寺も、戦国時代の争乱で衰微、荒廃しました。この寺が復興したのは、江戸幕府が成立し潮来地方が水戸藩領になってからです。慶安元年（1648年）に10石の朱印地が与えられました。

長勝寺が水戸藩との結びつきを深めたのは、2代藩主徳川光圀（義公）の時からです。貞享2年（1685年）、光圀は水戸の江林寺に招聘していた太嶽祖清を長勝寺の住職に迎え、寺の復興にあたらせました。太嶽祖清は臨済宗妙心寺派の大本山妙心寺253世住職を務め、退隠後に奥州二本松の松岡寺を開山した名僧です。太嶽和尚は法嗣（はっす＝弟子）の瑞雲とともに寺の復興に力を尽くしました。又、光圀は藩政の重要な政策の一つとして社寺の改革を実施し、領内で多くの寺院が破却や移転などの処分を受けましたが、一方で大寺や由緒ある寺院の復興が図られました。長勝寺の復興はその例であります。瑞雲和尚は元禄5年に鐘楼を建立し、同7年には旧仏殿の解体工事に着手しました。老杉（ろうさん）林立する稲荷山を背景にした境内は参道も長く、阿弥陀三尊物を安置する仏殿、山門はともに豊かな禅宗様建築の遺構で禅寺の風格を保ち、また中朱門（ちゅうじゃくもん）の中の方丈・書院等も元禄の建物で水戸家ゆかりの宝物を収蔵しています。仏殿は禅宗様建築の特徴を示しており地方寺院としては貴重な遺構です。昭和56年から7年間かけて仏殿・山門保存修理工事（解体・組立工事）が行われました。

#### (2) 山門

関戸文書「長勝寺物語之事」によれば、藩主徳川光圀の特別の意向により、延方に移築の普門院旧跡に残された山門が元禄13年（1700年）に長勝寺に移築されたものです。構造様式は三間一戸、二重二階門。上層屋根は入母屋造で、上層、下層とも柿（こけら）葺形の銅板葺。軒の上層には二軒扇垂木（ふたのきおうぎたるき）、下層には軒平行垂木が用いられ、円柱の根元に礎盤、上層の柱間装置に棧唐戸を用いた禅宗様の建築です。建築年代は定かではありませんが、軒廻りや細部の建築手法を見ると、桃山時代の建物と思われます。昭和56年から7年間かけて行われた解体修理により紅柄塗に復元しました。昭和33年（1958年）3月12日に茨城県指定有形文化財に指定されました。



山門

昭和33年（1958年）3月12日に茨城県指定有形文化財に指定されました。

#### (3) 仏殿

建立年代は不詳ですが、元禄年間（1688～1704年）に再興されたと推定されています。方7間、一重入母屋造茅葺の建築で、棟上に「笹竜胆」の紋が配されており、身舎の周囲に板葺きの裳階（もこし）があり、内部構造や外部の組物などは禅宗様の手法による建築で中央後方の来迎壁前に高い禅宗様須弥壇（しゅみだん）を設け、背面に突出して脇仏壇があります。内外ともに一段基上に建つ堂々たる禅宗様建築です。

建立年代は詳らかではありませんが、軒廻りその他細部に桃山時代の様式手法が窺われます。

規模雄大な建築で、禅宗様建築として貴重な遺構で山門と同じ昭和33年に茨城県指定有形文化財に指定されました。



仏殿

#### (4) 銅鐘

元徳2年(1330年)鎌倉幕府14代執権北条高時が下総国府城主千葉五郎禅門道暁との発起により、長勝寺の創建者である源頼朝の菩提のために寄進したものです。鐘銘と序文の中に寺の沿革が記されています。鐘銘と序文の作者は嘉歴元年(1326年)元から来朝した鎌倉円覚寺16世清拙正澄和尚

(大鑑禅師)で、鋳物師は甲斐権守ト部助光です。総高115cm、身高84.8cm、龍頭高24.5cm、口径66.3cm、撞座(つきざ)中心高19.9cmの鋳銅。形状は小型ながら鎌倉期の特徴をよく示し、まことに気品の高い形状をしています。銘文も刻字も優れ、名鐘に恥じないものです。銘文中に「客船夜泊常陸蘇城」の語が記されており、中国蘇州を彷彿させる当時の潮来の繁栄と風光明媚な情景をうかがい知るうえで貴重な資料となっています。

明治44年(1911年)8月9日に国宝に指定されましたが、昭和25年の文化財保護法の施行により国重要文化財の指定を受けました。

【注釈】「客船夜泊常陸蘇城」：潮来は、夜ともなると旅客や積荷を運ぶ船などたくさん停泊して、水郷の景観はいわば“常陸の蘇州”といったところである。



鐘楼・銅鐘

#### (5) 阿弥陀三尊(木造阿弥陀如来像及び両脇侍像)

像高は中尊阿弥陀如来89.4cm、左脇侍観世音菩薩107.5cm、右脇侍勢至菩薩106.3cmです。阿弥陀如来は上品上生の印を結び結跏趺坐(けっかふざ)しています。両脇侍像は対照的に両手を上げ下げした立像の菩薩であり、三尊ともヒノキ材、寄木造、漆箔、玉眼嵌入の像です。その作風は整った細かい切付螺髪(らほつ)、薄くならかな衣紋線など定朝様をひく旧派の仏師による造形ですが、玉眼を使用すること、阿弥陀如来の面貌や体軀にしっかりした肉取りと張りがあることなど、鎌倉時代風の写実味を加えたものです。観音、勢至両菩薩像にもこの

ことがうかがえます。これら三尊の制作年代はほぼ同時期で鎌倉時代中期と思われます。作者は詳らかではありません。昭和33年3月12日茨城県指定文化財となりました。



仏殿内阿弥陀三尊像他仏像

#### (6) 方丈・書院・玄関・庫裡・隠寮

木造平屋建て、棧瓦葺で約500㎡、東に隠寮(師家または長老の居所)、西に方丈(住職の居所、転じて寺の本堂を指す)、南に庫裡(台所)、北に書院を配した寺院形式の建物です。建立年代は詳らかではありませんが、組物など細部の様式手法により元禄時代中期の建立と考えられます。昭和46年3月29日に茨城県指定文化財となりました。

#### (7) 禅宗様建築

禅宗様は日本の伝統的な寺院建築の様式の一つ。鎌倉時代後半、武士の帰依を受けた禅宗寺院で取り入れられた様式で、当時の中国建築の直写が目指されました。唐様ともいいます。従来の寺院建築である和様、また鎌倉時代初期にもたらされた大仏様に対する言葉で、大仏様とは共通する部分も多く、あわせて鎌倉新様式または宋様式と総称されます。

**禅宗様の特徴**(主なもの、一部は大仏様の特徴にも通じる)

- 仏殿は平面正方形で、間仕切りの無い一室堂
- 屋根に強い反り。ただし裳階屋根の反りは小さい
- 放射状に垂木を置く扇垂木。ただし裳階は平行垂木が一般的
- 柱と柱の間にも組物を入れる詰組（つめぐみ）
- 貫（ぬき）を使い構造を強化（長押（なげし）は用いられず）
- 柱は丸柱で上下端をすぼませる粽（ちまき）
- 柱の下にそろばんの玉を大きくしたような形の礎盤を置く
- 窓は上部に複雑な曲線の付いた火灯窓（花頭窓）
- 扉は四周の框（かまち）と縦横の棧を組み、棧と框の間に入子板を嵌め込んだ棧唐戸
- 床は土間床で、瓦の四半敷（目地が縦横の線に対し45度になる敷き方）で仕上げる

## （8）芭蕉句碑

松尾芭蕉 … 江戸時代前期の俳諧師、伊賀国上野（現在の三重県伊賀市）出身、名は忠右衛門のち宗房（むねふさ）、俳号としては初め宗房（そうぼう）を次いで桃青、芭蕉（はせを）と改めました。数度の旅を通して俳諧に高い文芸性を加えた蕉風を確立しました。

貞享4年（1687年）8月、奥の細道の旅に出かける2年前、芭蕉44歳の時、禅の師匠である常陸国鹿島根本寺の先代住職仏頂禅師から、月見の誘いを受け曾良と宗波を伴い鹿島に旅立ちました。この旅の紀行文『鹿島詣』が後に出版され、

『鹿島紀行』ともいわれています。この鹿島紀行の最後に「帰路自準に宿す」としてこの句が掲載されました。

### ①鹿島紀行自準亭での三吟連句の大意

**峙（ねぐら）せよわら干す宿の友すずめ** **松江**

この句は松江こと自準（本間道悦）の発句である。芭蕉たちを「友すずめ」と呼びかけ、まずしいながらも宿に使って下さいと温かい雰囲気申し出ている主人の挨拶句です。

**秋をこめたるくねのさし杉** **桃青**

この七七の句は、桃青こと芭蕉の脇句で、主人の挨拶句に対する返礼の句です。「くね」とは関東地方の方言で生垣のこと。

「さし杉」とは挿し木した杉のことです。

「秋をこめたる」の表現には、こんもりと茂っているという意味と、生垣にまで気配りまでして迎え入れてくれた主人の心のこもったもてなしに対する謝辞が表現されています。

発句で自準が自分の宿を「わら干す宿」と表現して卑下したのに対し、脇句では自準の家を見事に育った杉の生垣のある落ち着いた家だと賛美しているのです。

**月見んと汐ひきのぼる舟とめて** **曾良**

この句は、発句、脇句に続く第三句で曾良の句。月見をしようと河口を上って行く舟を呼び止めている句です。第三句は話題を転ずることを本意にするといわれ

るが、この句は確かに宿の句からは転じた内容になっています。

### ②芭蕉時雨塚

**たび人と我名よばれむはつしぐれ** **はせを**

『鹿島詣』の2か月後、亡父三十三回忌の法要に参列するため、伊賀に帰郷した際に創作された作品集『笈の小文』の序文の句です。奥州の也烏庵（やふあん）一艸（草）（いつそう）が芭蕉翁百年忌を期して建てたという石ぶみです。俳聖芭蕉の崇敬者であった一艸はその境涯にあやかりたいと出家時雨坊を名乗り各地を行脚し蕉風の高揚につとめました。



三吟連句碑



時雨塚

(9) 春の桜、秋の紅葉、2月の梅、6月の菩提樹

### 春の桜

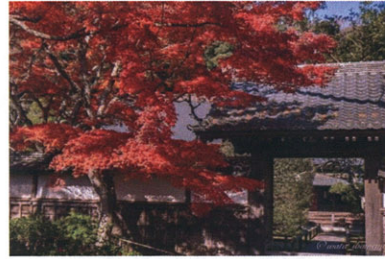
長勝寺の桜は3月下旬から4月上旬に見頃を迎え、茨城県内でも有数の桜の名所です。

### 秋の紅葉

中朱門前の紅葉も深まる秋の情景を、古刹を舞台に見事に演出する名所となっています。



長勝寺の桜



中朱門前の紅葉

### 2月の梅

鐘楼横の梅林及び文治梅も禅寺の冬の静寂の中で凛として咲き、一層風趣をそそります。

長勝寺は銅鐘の鐘銘により右大将、源頼朝公を開基とするとあります。文治梅は公お手植えの伝説もあり、寺の創建文治元年の年号に因んで文治梅と称されています。

文治梅のそばには、「古乃者那也曾毛加麻久良能鐙乃銘（この花やそも鎌倉の鐘の銘）」の伊能鳳後の句碑があります。句碑は豪快な文字が印象的で、鳳後の弟子たちが文政11年（1828年）に建立したものと考えられています。鳳後は伊能忠敬を生んだ千葉県佐原の伊能家の5代目で、潮来で読み書きを教えていました。伝説の梅の香りと、実在する格調高い鐘銘を前に、鎌倉と寺の歴史に思いをはせた句です。

### 6月の菩提樹

中国原産の落葉高木。花期は6月頃で淡黄色の花を咲かせます。花柄が分枝して垂れ下がり花序の柄には苞葉を付けます。臨濟宗の開祖栄西が中国から持ち帰ったと伝えられます。釈迦は菩提樹の下で悟りを開いたとして知られますが、釈迦の菩提樹は本種ではなくクワ科のインドボダイジュ（印度菩提樹）のことです。中国では熱帯性のインドボダイジュの生育には適さないため葉の形が似ているシナノキ科の本種を菩提樹としたと言われます。

仏教の三大聖樹…無憂樹（生誕の地）、印度菩提樹（悟りの地）、沙羅双樹（入寂の地）



長勝寺の文治梅



#### 4. 水郷旧家「磯山邸」

##### (1) 磯山邸の建築の特徴

磯山邸は明治32年に建築された日本家屋を改築した、古き良き時代の潮来の佇まいを残した古民家です。

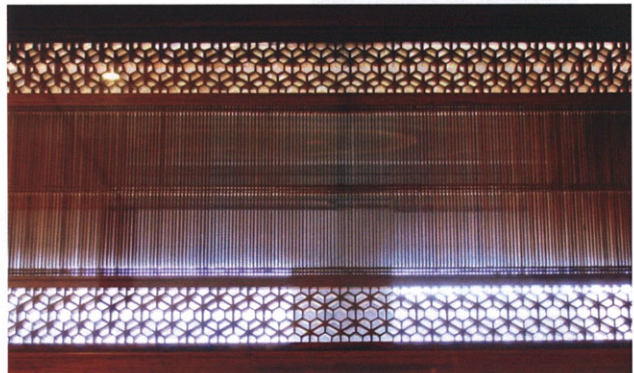
JR潮来駅から歩いて約7分の所にあります。施設は、延べ床面積約110平方メートルの木造平屋建て。間取りは10畳1間と8畳2間で、いずれも和室で、家の西側には約90平方メートルの広さの庭もあります。

建物としての特徴を挙げると、土間から内部を見上げると、太い梁（はり）と約30cm角の檜（けやき）の大黒柱が目に入ります。さらに、3種の組子細工が施された引戸があり、東側の壁には微細な彫刻が施されている欄間を移設した窓枠があります。

また、床の間の横には非常に精緻な組子細工の窓があり、この組子細工を作成するだけで、腕のいい職人でも半年は要するという、往時の潮来職人の巧みな技のすごさが感られます。畳の部屋に上がると、4つの提灯箱があり、次の間には檜製の重厚な神棚が設置され、西側から南側にかけての外周の廊下はすべて檜の板が使われており当時の生活が偲べれます。



磯山邸の入口 土間からの構造



床の間にある組子細工の窓

##### (2) 磯山邸の現在の使われ方

潮来市は磯山邸の活用のため、茨城県では初めて地方創生事業として、白壁の内部に筋交いを設置し耐震強度を高め、畳や内装もリニューアルして各種観光用のイベント会場などに活用を進めました。最大の特徴はこの古民家を1棟丸ごと宿泊施設として活用しており、宿泊料金は55,000円(税込み)で、最大10人で利用でき、古き良き潮来の風情や日本家屋の生活を楽しめるスポットとして利用されています。

道路を挟んで南側の前川では、初夏の「水郷潮来あやめまつり」の期間中に「観光ろ舟」が行き交い、大人気の「嫁入り舟」のイベントでは、花嫁が磯山邸からあやめ園までを、ろ舟と人力車で往復する際の起点・終点になっており、多くの観光客に楽しみを与えています。

前川の河岸には、江戸時代の物流の中心の河岸となった津軽河岸が再現され、そこに石蔵が建てられ磯山邸とタイアップすることで観光スポットとしての活用が図られています。

## 5. 前川の河岸史跡

前川沿いは古くから水運の要所でした。特に江戸幕府が成立すると、東北諸藩の年貢米や諸物資が内川廻り潮来經由で江戸に回漕されるようになりました。当時、大量の物資を輸送するのに、水上輸送が陸上輸送よりも便利で、運賃も安かったからです。内川廻りで潮来を経て江戸に入る舟運には、2つのコースがありました。

その1つは、奥州方面から太平洋を南下した廻船が、那珂湊から涸沼に入り、海老沢河岸(茨城町)に荷揚げされ、そこから馬に積み替えて陸路を紅葉(銚田市)や下吉影(小美玉市)まで運び、小舟で巴川を塔ヶ崎や串挽河岸(銚田市)におろし、ここで高瀬舟に積み替えて北浦から潮来に出るコースです。潮来からは現在の常陸利根川から横利根川を通して佐原に出て、利根川を溯り、そして関宿(千葉県野田市)から江戸川の舟運を利用しました。このように手数のかかる積み替えや、距離の延びる迂回路を辿るコースが利用された理由は、当時、鹿島灘沖の航行が危険であり、房総沖を回って江戸湾に乗り入れることが技術的に困難であったからといわれています。

潮来を通る2つ目のコースは、奥州から南下した廻船が那珂湊を経て鹿島灘を乗り切り、銚子の河口から潮来に入り、潮来で海船から川船に積み替え利根川を溯上して江戸川に入る方法でした。これはのちに銚子で海船から川船に積み替えるように変わって行きました。

この2つのコースのうち、那珂湊から涸沼を経由して潮来に出るコースが先に開かれ、その後、銚子河口から入船するコースが一般化したとされてきましたが、近年、両コースとも近世初期から利用されてきたとする説が有力になっています。しかし、いずれのコースを辿っても寛文期(1661~1672年)から元禄期(1688~1703年)には、東北諸藩から潮来を経由して物資が江戸に廻送されました。

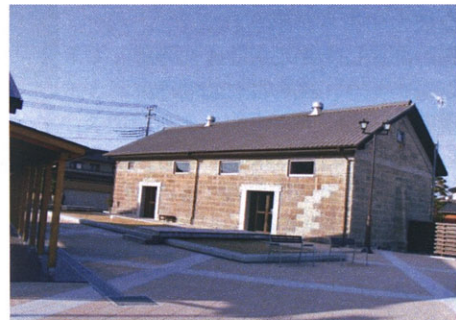
そのため、前川筋には仙台藩や津軽藩などの蔵屋敷が設けられ、潮来では遊郭も営業し港町として、行楽地として繁栄しました。河岸跡・屋敷跡には現在は史跡碑が建てられています。

### (1) 津軽河岸の歴史

「旧跡津軽屋敷」の跡地には、津軽河岸と石蔵が復元されており、観光スポットとして活用されています。

「津軽屋敷」は津軽藩の記録によれば、江戸への御膳米の輸送が開始されたのは、寛永2年(1625年)となっています。この年は青森開港の年です。この「御膳米」とは、江戸藩邸での自家消費のためのものでしたが、やがて、江戸市場での換金用の米も運ばれるようになりました。その後元禄期までの間には「屋敷」が必要となるほど、津軽産物資の輸送が増えたと言えます。

「茨城の民俗」第5号延方新莊桜涯氏の論文「汐来における仙台と津軽の蔵跡」によれば、仙台藩の潮来屋敷は、慶安2年(1649年)に置かれ、宝暦6年(1752年)に廃止されたとの記載があります。川筋の変化の他に、潮来で海舟から川舟(高瀬舟)に積み替える利根川經由の他に、直接江戸まで運送する東回り廻船の利用が主流になったことも、津軽屋敷の廃止の理由だったと考えられます。



復元された石蔵



復元された津軽河岸

## (2) 大門河岸

大門とは施設の外殻にある大きい門の意味です。大門河岸は長勝寺から約250mの位置にあり、昭和5年の地図で見ると、奥行き10m、幅10mと推定されます。

長勝寺の大門がある河岸が大門河岸と理解すると、常陸風土記の行方郡に記載されている内容から、「板来」の駅家は長勝寺付近に設けられたと考えられます。大門河岸は駅家が置かれたところからの船着場として、源頼朝が長勝寺を建立するにあたって、この船着場を利用して船着場から寺への直線道路を正門道とし、総門である「大門」が浜辺に建立され、船着場が整備され、大門河岸となったと考えられます。

【参考：常陸風土記の記載内容】

板来の村あり。近くに海浜に臨み、駅家を安置せり。ここを「板来の駅」という。



## (3) 上米（城米）河岸

城米河岸は水戸藩の河岸で、城米の集積地でした。現在は住宅地になっていますが、当時は倉庫や役所、関係役人の住居が立ち並んでいたとされます。この河岸は水戸藩が置かれたところに設置されたと考えられています。



## (4) 仙台河岸

仙台河岸は川岸に4つの河岸が設けられ、川岸には約9万㎡の土地に蔵や住居等の建物があったと推定されています。

「茨城の民族」第5号延方新莊桜涯市の論文「汐来における仙台と津軽の蔵跡」によれば、仙台藩の潮来屋敷は慶安2年（1649年）に置かれ宝暦6年（1752年）に廃止されたとの記載があります。川筋の変化の他に、潮来で海舟から川船（高瀬舟）に積み替える利根川経由の他に、海舟で直接江戸まで運送する東回り廻船の利用が主流になったことが津軽藩の潮来屋敷が廃止された理由と考えられます。



## (4) 天王河岸

素鷲熊野神社の南に位置し、素鷲神社が天王原から文治4年6月に遷座された地で、天王河岸の名前も素鷲神社つまり天王様の名によります。今は、潮来祇園祭時に御仮屋を建てる場所として鳥居と常夜灯などがあります。現在は天王河岸は埋め立てられています。



## 6. 宮本茶村

### (1) 宮本茶村の歴史と功績

宮本茶村は板来の庄屋、宮本平右衛門高重の第2子として生まれ、総敏で学問を学び、9歳で漢詩を作ったと言われています。志を抱いて江戸に遊学し、顕儒山本北山の門で詩文、経史等を学び、学問を治めて故郷に帰ると茶村の噂を聞き多くの人が勉学に訪れました。住まいの南に香取、西に香澄、東に香島があることから居所を「三香社」と名付け、「恥不若」という私塾を開き教育を施しました。延方、潮来の郷校でも教鞭をとりました。

文政12年、水戸藩で斉昭が9代藩主になり、藩政改革を行おうとしていました。翌天保元年、茶村は時局の急務を上書して執政に協力しました。かねてより村の有志に説いて義倉を建て、天保7年に飢饉が起こると更に資産を放出し窮民を救済しました。弘化元年、斉昭公が幕府の嫌疑を受けて謹慎を命じられ、近臣たちも処罰を受けた時、茶村は江戸に潜入し幕府の内情を探り、先頭に立って斉昭謹慎の雪冤（せつえん）運動を展開しました。その作戦計画は極めて周到で、有志達も茶村に敬服して従いました。

幕府はこの運動を嫌い、茶村は捕らわれ、水戸赤沼の獄舎につながれた時、茶村は泰然自若として少しも平生と変わらない態度であったと言われています。

獄にあること3年、許されて家に帰り塾居を命じられました。嘉永2年に藩命をもって塾居を解かれ、そこで号を水雲と改め、その後は世事を絶ち著述に専念しました。

嘉永5年、吉田松陰が22歳の時に水戸藩を訪れ、水戸学の洗礼を受けました。その時茶村の家にも泊まり、その後銚子の視察に出かけたとの記録が残っています。

文久2年(1862年)6月25日、郷土の潮来で70歳の生涯を閉じたとき、茶村の死をいたむ送葬者は千余人と伝えられています。墓は宮本家の菩提寺浄国寺に隣接する旧邸内にあります。



吉田松陰の茶村訪問の碑

### (2) 延方郷校と潮来郷校

水戸藩には庶民教育のため、藩内の各地に15の郷校がありました。そのうち潮来市には2つの郷校があり、しかも延方郷校は2番目に古く、小川の稽医館の2年後、文化4年(1807年)に開設されましたが、これは水戸藩校弘道館より34年も前です。高台にある潮来高校の麓に延方郷校跡の碑が建っています。

延方郷校は、この地方の南郡奉行小宮山楓軒の尽力により設立され、元加賀藩士沢田平格の他に、久保木幡竜、宮本茶村なども教鞭をとって、儒学の他に医術、武術などを教え多くの人材を育成しました。この郷校にあった聖堂(孔子廟)は文政3年(1820年)に建立され、明治12年(1879年)辻に移築され、二十三夜尊堂として現存しています。延方郷校の初代孔子聖堂は現在恵雲寺「七面堂」として残されています。

学問の神様孔子を祀るこの聖堂は、光圀公が招いた儒者、朱舜水が制作した模型を元に作られたといわれます。朱舜水は水戸藩に聖堂を建てることを夢見ていましたが叶わず、その模型により後世建てられたのは、湯島聖堂と延方聖堂だけでした。湯島は震災、空襲で消失してしまい、現在は修復されていますが、この聖堂だけが貴重な教育遺産として残っています。



延方郷校の孔子廟(二十三夜尊堂)

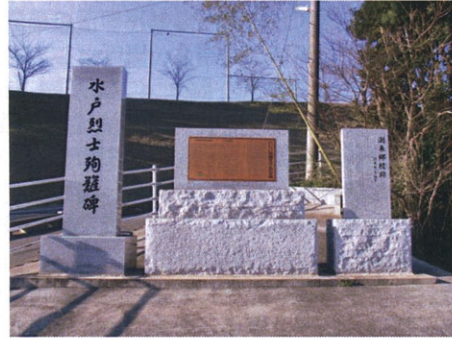
屋根には孔子廟には必ずある鬼狹頭（きぎんとう）という神獣が載っています。落成時には8代藩主斉脩公直筆の「至聖先師孔子神位」の木碑が安置されました。

延方郷校設立から50年後、水戸藩も日本も時代の大きな変革を迎える波に翻弄されていました。そんな時代に即して安政4年（1857年）に建てられた潮来郷校は、南郡奉行の金子孫二郎（のちに桜田門外の変の首謀者）の肝いりで、当初は岩谷敬一郎（のちの天狗党の乱リーダーのひとり）が館長を務めました。他に潮来郷校掛として林五郎三郎（那珂湊の戦いで戦死）、上戸村庄屋 前島徳之介（天狗党西上の際の幹部の一人）がいました。

当時、小川・湊・潮来の郷校は「三館」と呼ばれ、尊王攘夷の激派が集結するようになり、諸生派と対立しました。

（潮来一中のある天王台の坂下に潮来郷校跡の碑が建っています。）

元治元年（1864年）には武田正生（耕雲斎）の提言で治安鎮静を目的に潮来陣屋を設けましたが、逆に尊王攘夷過激派の拠点と化し、天狗党騒乱では、潮来郷校は陣屋ともども幕府の掃討軍により焼き討ちされてしまいました。郷校に学んだ多くの若者たちも後の戦いや処刑等で犠牲になりました。大発勢に加わった81名、天狗党として京を目指し（西上）敦賀に散った61名の名が銅板に刻まれた【水戸烈士殉難碑】が郷校跡の碑と共に建てられています。



潮来郷校跡と水戸烈士殉難の碑

## 7. 本間自準亭跡（史跡）

### （1）本間道悦

本間道悦は近江の領主戸田左門に仕えた本間資勝（すけかつ）の三男として生まれました。戸田家が大垣に移封された時期には大垣に住んでいました。寛永14年（1673年）本間道悦が15歳の時、九州・島原の乱が起こった際に出陣しましたが、左足を負傷したため、武門を捨て、医師となり戸田藩の藩医として仕えました。やがて江戸に出た本間道悦は、日本橋青物町に居を構え、医師として名声を高めるとともに俳諧にも優れ松江と号し、松尾芭蕉とも親交を深めるようになりました。

延宝10年（1682年）に本間道悦は潮来天王河岸に居を構え、「自準亭」と名付けた診療所を開設し、困窮する村民に無料で診療しました。潮来に居を構えた理由の一つとして、芭蕉の禅の師ともいわれる仏頂和尚が江戸深川より鹿嶋の根本寺に移り住んだことで、本間道悦は根本寺に近い潮来を選んだと言われています。

その後「自準亭」では、潮来の商家が栄え発展するに従い「読み、書き、そろばん」を中心に礼儀作法や日常生活に必要な学習等の教育を行いました。

道悦は元禄10年（1697年）79歳の生涯を終わりましたが、2代目道因が家業を継ぎ、3代道仙も医業にあたりました。この道仙が上戸の長国寺に祖父道悦と父道因の2人の墓碑を建てました。4代道意（今の小美玉市に移住）、5代玄琢は歴代水戸藩医として活躍しました。

本間家はその後も代々名医を輩出、なかでも8代玄調は水戸藩主徳川斉昭に仕え、漢方のほか西洋医学を修め麻酔を使った外科手術や種痘等、近代医学を築き水戸三の丸に銅像となっていることは特筆すべきものです。



### （2）松尾芭蕉 鹿島紀行との関係

俳聖・松尾芭蕉は、参禅の師の鹿嶋根本寺の住職仏頂和尚と、江戸で医師を開業し、後に潮来にいる本間道悦と親交がありました。芭蕉は貞享4年（1687年）8月、鹿島の山の月見を志し門人曾良と宗波を伴って仏頂和尚を訪ねて旅に出て、その帰路本間自準を訪ね、現在長勝寺にある三吟の句を詠んだとされています。

長勝寺にある三吟（現在の小美玉市にも三吟の句碑があります。）

ねぐらせよ 藁ほす宿の友すずめ （本間自準）

あきをこめたる くねの指杉 （桃青・芭蕉）

月見んと 潮ひきのぼる 舟とめて （曾良）

この時の紀行文が『鹿島紀行』として知られ、『奥の細道』の2年前のことです。

## 8. 素鷲熊野神社（そがくまのじんじゃ）

### (1) 歴史

素鷲熊野神社は、辻の天王原に祭られていた小社を、文治4年（1188年）に潮来の天王河岸へ移し、牛頭天王（ごずてんのう）と呼んだのが素鷲神社の始まりです。牛頭天王は八坂神社の祭神で、元来はインド祇園舎の守護神とされ、疫病除けの神として知られています。文治4年の遷座と牛頭天王を奉斎した背景には、潮来地方での疫病の流行などがあったものと思われます。元禄9年（1696年）に牛頭天王は、一村一社の政策により現在地に移り、熊野三社権現と相殿になりました。さらに天保15年（1844年）、牛頭天王は仏教色の強い呼称から、神道的な素鷲神社へと社号を改め、同時に熊野三社権現も熊野神社と名前がかわりました。明治10年（1877年）に長く相殿であった両社は、素鷲熊野神社となって現在に至っています。祭神は、素鷲社は須佐之男命（すさのおのみこと）、奇稲田比命（くしなだひめのみこと）で、熊野社は伊弉諾命（いざなぎのみこと）、伊弉册尊（いざなみのみこと）、速玉男命（はやたまおのみこと）、事解男命（ことさかおのみこと）。境内には神明神社、大六天神社、松尾神社、淡島神社、金比羅神社、愛宕神社、大杉神社、稻荷神社が祭られています。

### (2) 潮来祇園祭り

潮来祇園祭禮は、元禄年間（1688～1704年）徳川光圀の命により天王山に鎮座する素鷲熊野神社が遷宮され、山車が奉納されたことに始まる素鷲熊野神社の例大祭で、800有余年の歴史と伝統のある祭禮です。

毎年8月の第一金曜日から日曜日までの3日間かけて行われ、まず初日に2体の神輿（俗に天王様、権現様と呼ばれている）が出御する「御浜下り」で始まります。各町内の山車がそろい、神輿をお迎えし、中日は町内渡御（町内御巡行）、最終日には還御（お山上り）が行われます。

この祭りに花を添えるのは、三丁目の獅子舞をはじめ、総数十四台もの山車、そしてこの山車にのった芸座連によって奏でられる潮来ばやしです。

山車のうち三台は県指定文化財、そして潮来ばやしは県指定無形民俗文化財に指定されています。圧巻は「のの字廻し」や「そろばん曳き」に代表される「曲曳き」で、若衆と山車、芸座連が一体となった様は必見です。

茨城県指定文化財

\* 無形民俗潮来ばやし 昭和39年7月31日指定

\* 有形民俗潮来祇園祭禮山車(3台)

平成5年1月25日指定

### (3) 大櫨（おおけやき）（県指定文化財）

潮来の天王様として親しまれている素鷲熊野神社の入口にある大けやきは、樹周目通り約8m、高さ約11m、推定樹齢約800年で、その姿は、威風堂々として、夏には大きな陰をつくり、参拝者の涼となっています。

このような大樹は当地方で珍しく昭和39年7月31日に県の天然記念物に指定されました。



潮来祇園祭



大櫨の大木

## 9. 稲荷山公園

### (1) 稲荷山の発足経緯と概要

江戸時代の稲荷山は江戸末期迄、徳川家より御朱印拾石を拝領の際与えられた長勝寺の寺領地で御朱印山と称しました。

南に隣接した潮来の古刹、長勝寺では代々の住職が樹林の下草刈り掃除をして保護管理をしていました。

この山は標高20mの小高い丘陵地にあり潮来の風致林とも、又航行の目標ともなっていました。

山の一角には当時の水戸藩主、光圀公がお成りの際にお茶を楽しんだ茶室「遺愛亭」跡の標識があります。明治維新になって上地を命ぜられ国有林となり国の管理が行き届かない為に荒れ放題で立木の杉は落雷のまま放置され、狐、ムジナ、イタチ、テン、ムササビ等の動物が棲みつき夜ともなれば人家や田畑を荒らして困ったそうです。

当時の住職がこれをみかねて役員とはかり、森林保護願いを陳情、50年間の長勝寺保管林として許可になり、それ以来長勝寺が保護管理に務めてきました。昭和32年(1957年)11月、国道51号改良工事用地として一部分割道路となり、杉の木立は町で落札しその杉は水雲橋の橋桁に、個人落札の杉は農舟に使用したと言われています。

稲荷山公園は茨城百景に数えられ明治39年(1906年)頃、町立女子技芸学校設立されましたが、昭和13年(1938年)学校が移転しその後、稲荷山公園となりました。公園内には宝歴13年(1768年)京都伏見稲荷の分霊をお迎えした「稲荷神社」や当地出身の政治家、橋本登美三郎氏の顕彰碑、野口雨情の歌碑(後述(3)野口雨情の歌碑)があります。

その他、展望台からは潮来の街並みを眼下に大利根、北利根、香取の社をはじめ十六島の水郷地帯を一望できます。令和元年(2019年)9月8日の台風15

号の近年に無い強風により樹齢数百年の杉の大木が倒れ、遊歩道周りであった紫陽花も根元からダメージを受けましたが地元の皆さんの尽力で紫陽花遊歩道A, B, C3ルートが立派に整備され、訪れた人を楽しませてくれます。

### (2) 古墳群

稲荷山公園には大生原台地から南に延びる細長い舌状台地の先端部に立地しており、三基の前方後円墳と5基の円墳によって構成されています。円墳の最大のものは一号墳で全長22m、高さ2.4mです。前方後円墳は台地の南斜面に並列しながら太平洋を望む場所に立地しており本古墳群の中心墳です。5号墳は全長34m、高さ2m程度で前方部と後円部はほぼ同じ高さです。6号墳は全長23m、高さ1m程度で前方部と後円部のくびれは弱い。8号墳は全長25m、高さ1m程度で前方部に比べ後円部は非常に大きい。

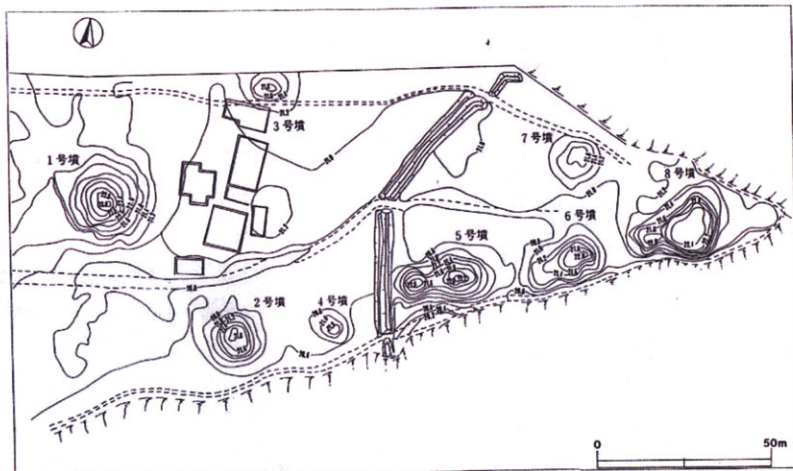


稲荷山公園内の樹齢数百年の杉



稲荷山公園内の稲荷神社

これらの古墳は形状的には僅かな時間差があるものの地膨状の低いもので、小円墳と小形前方後円墳から成立している事と埴輪が採集されていない事等から6世紀末から7世紀初頭の後期古墳とされます。又、大生原台地の南端枝状台地に選地していることから大生古墳群に葬られた人々と同族であったものとしても身分差が感じられ、更に前方後円墳の主軸方向が鹿島市中野古墳群の方向を向いている事に注目したい。



稲荷山古墳群分布図

### (3) 野口雨情の歌碑

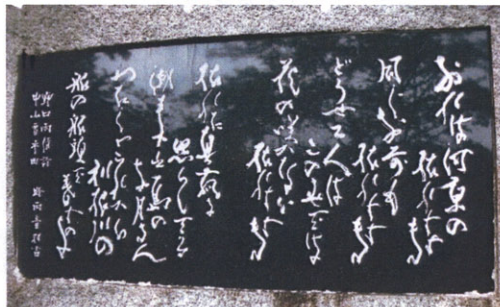
稲荷山公園には五つの石碑があります。野口雨情の歌碑、水郷汽船(株)社長の菊池寛実顕彰碑、郷土の政治家、橋本登美三郎代議士の顕彰碑、潮来築堤記念之碑、潮来町立女子技芸学校跡碑の五つです。中でも際立っているのが野口雨情の

「船頭小唄」の歌碑です。歌碑は雨情顕彰会によって昭和41年10月に完成した御影石の顕彰碑です。この歌碑は雨情の詩の友である時雨音羽が稲田に行って石を運び、寂しい歌を小さく書いたのではと竹を潰して筆を作り、文字を大きく揮毫をしたとの事です。

野口雨情は茨城県生まれで素朴な田園的情趣を主体とした作品を多く発表しました。「七つの子」「シャボン玉飛んだ」「青い目の人形」等、歌い継がれる童謡を残しました。中でも“おれは河原の枯れすすき〜♪同じお前も枯れすすき〜♪”で始まる「船頭小唄」は野口雨情作詞、中山晋平作曲のコンビで大正10年に作られ全国的に歌われました。日本の歌謡曲に大きな影響を与え、今も人々に口ずさまれています。雨情は明治、大正、昭和三代にわたって童謡、民謡に多くの足跡を残した詩人です。



野口雨情の歌碑



竹筆で豪快に書かれた歌詞

## 10. 二本松寺（あじさいの社）

### (1) 二本松寺の歴史

二本松寺は、天台宗羽黒山覚城院二本松寺と号し、本尊は秘仏薬師如来です。

平安時代の天長年間(824年)、慈覚大師円仁によって現在の潮来市茂木に創建されたと伝えられています。鎌倉時代建久2年(1191年)、島崎氏初代左衛門尉高幹公が島崎城築城の際、京都・比叡山を模して鬼門除けとする為、1ヘクタールの敷地を寄進、現在の地に移転開山しました。この時、境内を城郭とし島崎城の砦の役割をもたせています。爾来400年、島崎氏代々の祈願寺として栄え、天正19年(1591年)に滅亡した後も、佐竹氏、水戸徳川氏の信仰を得、歴代城主尊崇により、末寺25ヶ寺を統轄する本寺として隆盛を極めました。この間室町時代中興第一世静海上人(1457年歿)は、当地を修行道場の霊地として多くの青年僧の養成に努めました。

江戸時代、第11世光温上人は寛文3年(1663年)、書写仏を奉祀建立し修験道と病氣平癒を念ずる書写仏信仰を広めました。元禄4年(1691年)、水戸光圀公は本堂と紅葉の聖經を寄進し、14石余の寺領と1万石の格式を与え、安永3年(1774年)には、檀頭大崎治郎兵衛氏が、更に寺領を寄進して、寺観も整いました。幕末から明治中期にかけて、神仏分離、無住と相俟って、寺運の衰退も余儀なくされ苦難の時代を迎えました。

二十世紀に入るや、幾多の戦乱が相次ぎ、いわゆる昭和の激動期となりました。この期にあっても、檀信徒の愛山護法の念厚く、復興に尽力、法燈は脈々と継承されてきました。

天台宗は、伝教大師(最澄)が、比叡山に草堂を結び、一刀三礼手彫りの薬師如来を安置し、一乗止観院(根本中堂)と称したことに始まります。

本尊薬師如来は桧材寄木造(玉眼入、漆箔)で、ほぼ等身(像66.1cm、蓮台総高135cm)の比較的大きい坐像です。本尊及び日光・月光両脇侍菩薩は秘仏で、開扉は「住職一代に一度限り」という厳しい口伝になっています。(茨城県指定文化財指定)また、薬師如来とそれを説く經典を信仰するものを守護する十二人の夜叉神将である十二神将の画像(市指定文化財)があります。

天然記念物の「二本松寺の榎」は、水戸光圀公がお手植えされたといわれ、潮来市指定文化財に指定されています。元禄4年(1691年)「ふたもとの松」とそれを詠んだ「光圀の歌碑」、花の香りが甘い菩提樹など、また魔除けのお札の由来であり、日本で初めておみくじを作った人と言われている「元三大師の石碑」があります。



天台宗羽黒山覚城院二本松寺



木造薬師如来坐像(日光・月光両脇侍立像)

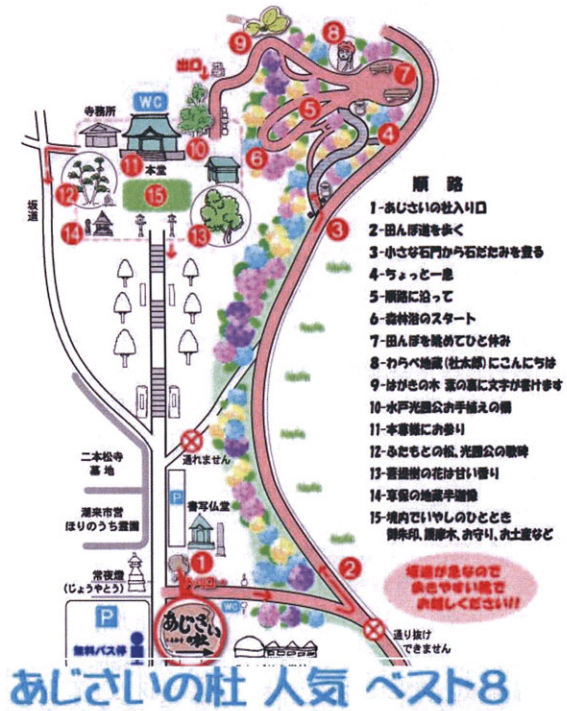
(2) 『あじさい祭の社』

『二本松寺あじさいの社』は、40,000㎡の境内に100種類1万株のあじさいが咲き誇ります。あじさい祭は、6月上旬～6月下旬に開催されます。入山参拝券(境内施設整備金)は、400円で、中学生以下は無料です。駐車場は無料で、120台以上止められ、大型バス専用の駐車スペースもあります。

あじさいの社の入口を入ると一方通行の田んぼ道を進んでいきます。瓦チップが敷き詰められているのでハイヒールの方でも歩けます。左側の斜面一面にはあじさい咲き誇り、その素敵な風景に癒されること間違いなしです。そこを進むと入口の看板があり、いよいよこちらからがメインになります。ここからは勾配がきつくなりますが、途中の石のベンチで休みながら、「天使のほっぺ」、「ミカコ」、「十二単(じゅうにひとえ)」など種々の美しいあじさいを眺めれば疲れも吹き飛びます。途中展望エリアがあり、素敵な田園風景が眺められます。ところどころに休憩場所があるのも二本松寺あじさいの社の良いところです。高齢の方でも安心してあじさい鑑賞が楽しめます。

又可愛いお地藏さんが迎えてくれます。出口付近には、葉の裏に文字が書けるハガキの木があります。出口を抜けると、あじさい祭の期間中は売店やイベントなどもお楽しみいただけます。『二本松寺あじさいの社』では、一方通行になっているため、最後にお堂にお参りするようコースが整備され、お参りが終わったら、こちらの階段を下ると駐車場に戻れます。

あじさいの社 順路案内図



- 順路
- 1-あじさいの社入り口
  - 2-田んぼ道を通く
  - 3-小さな石門から石だたみを登る
  - 4-ちよっと一息
  - 5-順路に沿って
  - 6-森林浴のスタート
  - 7-田んぼを眺めてひと休み
  - 8-わらべ地蔵(社本前)にこんにちわ
  - 9-はげ色の木 葉の裏に文字が書けます
  - 10-水戸光徳公お手植えの樹
  - 11-本尊様にお参り
  - 12-ふだもとの仏、光徳公の歌碑
  - 13-菩提樹の花畑お参り
  - 14-草履の地蔵平遊庵
  - 15-境内でいやしのひととき 御朱印、観音木、お守り、お土産など



## 1 1. 島崎城史跡

### (1) 城跡と中世の潮来

中世の潮来地域は大塚(だいじょう)氏の流れをくむ豪族で戦国時代の武将島崎氏が治めていました。その拠点が鹿行地方最大級の島崎城です。島崎氏は、戦国時代の16世紀に入ると急速に勢力を拡大していきます。1522年から1584年までに近隣の長山氏、麻生氏を攻め滅ぼし、鹿島氏、玉造氏を攻め、南方三十三館と称された鹿行地方の豪族のトップとなり、隆盛を誇りました。大永2年(1522年)に西方の長山城を攻略しますが、これに先立ち眼前の大台城西出城を増強したようです。この時期、島崎城の外郭部にあたる内野遺跡では建物が建ちはじめ島崎城は巨大化するなど、島崎氏の成長の様子がわかります。その島崎氏も豊臣秀吉による天下統一後の天正19年(1951年)に、島崎安定など南方三十三館の城主たちは佐竹氏のいる常陸太田市に呼び出され、全員が謀殺され(「南方三十三館の仕置」)島崎氏は滅亡しました。

佐竹氏は常陸南部の新たな支配拠点として大台城を築き、完成までの間は島崎城を利用したのです。当時の料を集めて完成した大台城は偉容を誇った事でしょう。しかし、佐竹氏も関ヶ原の戦い後秋田に移封され、当地における中世も終わりを迎えました。

### (2) 島崎城

島崎城は、1.5km西方に常陸利根川を望む、北から南へと半島状に突き出した台地上に築かれています。今は宅地や耕地となっているものの、全体的には保存状態が良好で、「根古屋」・「古屋」・「古宿」・「宿」・「芝宿」などの城下集落を物語る地名が残り、歴史学はもとより地理学・民俗学など多方面にわたって注目される城郭遺跡です。

島崎城の構成は内城・中城・外城地区に大別され、主郭と考えられているのは一の曲輪で、現在御礼神社が鎮座し、南側には櫓台とみられる大型の土塁が残されています。北側に位置する西二の曲輪、水の手曲輪、馬出曲輪とは、現在も2~4mの深さの空堀があり、これと土塁で遮断されていました。とくに馬出曲輪に面した土塁は大型で、櫓などの建物があったと考えられています。東二の曲輪の外周に土塁が設けられ、腰曲輪と呼ばれる小さな空間により、北側の三の曲輪と繋がっていました。この二の曲輪までが内城地区で、城の中核部です。中城地区にあたる三の曲輪は島崎城最大級の空間を誇り、北方に深さ10m以上で良好に残る大堀が掘られ、これにより北は外城地区になります。外城地区は「根古屋」の地名から家臣団の屋敷が営まれていたと推測されます。

※曲輪(くるわ)とは

内外を土塁、石垣、堀などで区画した区域の名称です。構造の形態や位置などによって、二の曲輪、三の曲輪、内曲輪、外曲輪、馬出曲輪等の名称があります。江戸時代には、本丸、二の丸、三の丸等の名称が付いています。

### (3) 大台城

大台城(現、牛堀中学校)は、常陸の大部分を手中に収めた佐竹義宣が領国南部の要として築城した挑山期の城郭で、戦国時代に機能した長山城と島崎城との中間に位置しています。築城は義宣の重臣である小貫頼久が文禄4年(1594年)頃から着手し、慶長元年(1596年)に一応の完成をみました。その後頼久は城代となって、佐竹氏行方領26、371石の内の蔵入地約1万石を支配しますが、慶長7年(1602年)佐竹氏の秋田移封に伴って城は廃されました。城の機能は領国南端の「境目の城」であると同時に物流の拠点でしたが、僅か7年でその幕を閉じています。

#### (4) 貴重な歴史資産

島崎氏は鎌倉時代から戦国時代にかけて、この地方を治めた豪族で、潮来市島須にある島崎城跡は、鹿行地方最大規模を誇る城郭跡です。全体的に保存状態が良好で、歴史学、地理学、民俗学と多方面にわたって注目されています。他にも牛堀地区には、いくつかの城跡があり、戦国時代のこの地域の様子を知る貴重な歴史資産となっています。潮来市(旧、牛堀町)では1986年以来、島崎城をはじめ近隣の大台城跡(現、牛堀中学校)、西出城跡など大規模な発掘調査が行われました。

#### (5) 島崎氏は400年もの長い間に渡ってなぜ生き抜けたのか？

島崎氏が島崎郷に住み着いた訳ですが、島崎郷はそんなに大きな領域ではありません。戦国時代の終わり頃には、行方全体が2万6千石といわれております。これを分け合う訳ですから、石高としてはそんなになかったと思います。その中で生き抜けたのは、他の大塚氏にも言えることですが、隣近所が親戚、同族ということが大きかったかと考えられます。やはり隣人は大事にしなければいけないということです。

それ以上に、この霞ヶ浦と北浦に挟まれた半島状の地形、外敵を寄せ付けづらいという、地理的な条件があったと思います。その地理的な条件というのは、人や物や文化などがもたらされる「水の道」が巡っていたことです。外海と繋がっている無限の道がそこには広がっていたことは重要なポイントでした。戦国時代に島崎氏が急激な拡大を可能にしたのも、「水上交通路」とそれに連なる「津・港」を通して富を掌握出来たことが、行方地方の旗頭と呼ばれるまでに成長を遂げた大きな要因と考えられます。

## 1 2. 大生神社、大生神社古墳群

### (1) 大生神社の創建とその経緯

神社境内には大生古墳群がこの神社を囲むように残っていて、オフ一族の奥津城（墓）とされています。当社の創建時代には大別して次の二説があります。

#### ①「当社棟礼の由緒書」

- (1)太古から当地に鎮座 (2)神護景雲元年（767年）大和国春日遷幸（鹿島神勸請による春日大社創建） (3)大同元年（806年）2月11日当地に遷還
- (4)大同2年（807年）鹿島に遷幸跡地（大生）に分霊を奉斎

#### ②「東家（鹿島神宮社家）文書」(1)大同元年（806年）11月14日、多神社から遷座し創建

以上の事から春日社の創建に関して鹿島神宮が社格を変えその変化に当社が関与したとみられています。

一方、国史・神名帳の文献には当社に関する記載はありません。鹿島神宮が発展するに伴い、当社鎮座地は神宮に包括されて末社となり、当社の祭礼には神宮から物忌（後述図4 東家蔵物忌乗輿参照）が出興したと伝えられています。

中世には豪族、大生氏からの崇敬を受けました。大生氏は後に没落しましたが江戸幕府からは祭田・山林の支配を許されました。明治に入り近代社格制度において郷社に列した本殿は安土桃山時代の天正18年（1590年）の造営であり三間社流造で間口6m、奥行7mで地方社殿としては大きく、また当地方では最古の社殿建造物であり、拝殿と齋殿と共に茨城県の文化財に指定されています。

神社境内には多くの巨木が育成していて昼でも薄暗く湿地性樹林の特徴を示す300余種の植物からなる樹林を形成しています。樹林は極相林の状態にあって生態学的にも貴重であるものとして県の天然記念物に指定されています。



図1 大生神社本殿



図2 神社参道周りの樹林

### (2) 大生神社例大祭

東家（鹿島神宮）の文書では大同元年（806年）11月14日に勅によって大生の神を奉斎したので11月14日から16日を例祭にしている、現在もこの期間内の15日に行われています。また古くから鹿島神宮の物忌（神宮の齋宮）がこの祭りに出興したとされ物忌が鹿島神宮の境内を出て祭祀するのは年6回中、大生神社の祭礼だけであり当社に対する特別待遇であった事が分かります。

物忌の出興は次の年6回で、その内の11月15日が大生神社の宮祭りです。

- |           |      |           |      |
|-----------|------|-----------|------|
| (1)正月7日夜  | 本宮祭  | (2)4月11日夜 | 奥宮祭  |
| (3)5月5日   | 流鏝馬祭 | (4)7月10日夜 | 大宮祭  |
| (5)7月11日夜 | 将軍祭り | (6)11月15日 | 大生宮祭 |

祭りでは祭儀が古式に則って行われた後、特殊神事の巫女舞神事が奉納される。巫女は氏子中の7歳から13歳迄の少女から籤引きで決めます。これは11月1日夜、氏子総代が籤を引いて決め、同家に気づかれぬように七五三縄（しめなわ）を張ります。

舞の所作は先輩が教えます。巫女の衣服は洗衣に緋袴、垂髪とし右手に幣、左手に鈴を執ります。祭儀は当日夕刻時から始まり、まず通例の大祭によって修祓献選餞祝詞奏上（榊行事の儀、塩行事、米行事、奉幣行事）があり開扉祝詞奉上、次いで古式豊かな巫女舞が奉納されます。楽人は7人囃子（笛2、小鼓1、大かわ1、大太鼓1、小太鼓1、神楽太鼓1）です。巫女は神前に向かって幣と鈴を上下する事しばし、終わって舞に移りますが舞は簡単な所作で後退3回、1進2回を繰り返して一連の所作が終わりとなり、再び同様な所作を行い2回目は神前を1周して終わります。この舞を5座又は7座にて約40分程度で終わる簡単なもので、終わり次第一同八枚手を行い開扉となります。この間2時間くらいです。古い儀式を残すものとして県の無形文化財に指定されています。



図3 巫女舞の様子

### (3) 物忌乗輿

大生宮祭りには鹿島神宮より物忌の乗輿が当社の庭に据えられ祀り数人と共に祭儀を執行します。図4は最後に据えられた乗輿で総檜板造り、屋根は切妻造りの妻入りとし身は長方形で幅二尺九寸（約88cm）奥行三尺八寸五分（約117cm）正面破風並びに四方左右に刻と金具を施し七五三縄を張り入口に暖簾を垂らします。彫刻は破風鳳凰、正面四隅に丸左藤花文を、左右には牡丹と菖蒲を施し金具は金銅で巴文を刻みます。尚、白木の轆（ながえ）を附し前後に之を受ける呉床一対が附属されます。

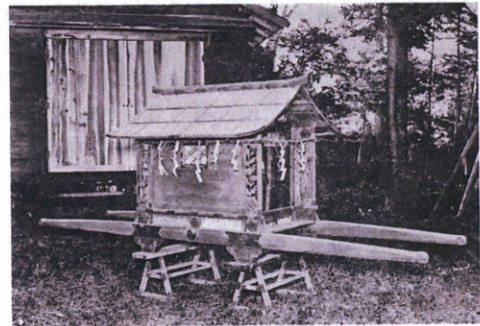


図4 東家蔵物忌乗輿

### (4) 大生古墳群とは

北浦西岸の大生原台地上にある古墳群で、前方後円墳・円墳・方墳など110余基の古墳からなり、茨城県では最大規模を誇ります。築造時期は古墳時代中期（5世紀）とみられ、古墳群は大生神社を中心として大生西部古墳群、大生東部古墳群、カメ森古墳群、田ノ森古墳群に大別されます。

このうち大生西部古墳群は代表的な鹿見塚古墳（図5県指定史跡）をはじめとして子子舞塚古墳（まごまいづか＝孫舞塚古墳）、天神塚古墳、白幡八幡塚古墳、など37基の古墳からなり、その面積は8.8ヘクタールに及んでいます。



図5 鹿見塚古墳（1号古墳）

(5) 大生西部古墳群の分布

古墳の基数は大生東部が60基(内前方後円墳2基)に対し西部の37基(内前方後円墳5基)で、大生西部が23基少ないが前方後円墳は5基と西部が最も多い。盟主的古墳である子舞塚古墳(全長71.5m)は発掘調査がなされており、埴輪や多くの副葬品が発見され、7世紀頃のものとして推定されています。

これらの古墳群の被葬者は鹿島神宮と密接な関係があったオフ氏(多氏・飯富氏)一族と見られています。また古墳群の中央に位置する大生神社は、この一族の奉斎する社とされ、各前方後円墳がいずれも大生神社又は鹿島神宮を向いている指摘もあり、大生神社社伝も含め鹿島神宮とオフ氏の関係について論議がなされています。

110余基の内、前方後円墳9基はほぼ確実に前方後円墳は図6の大生西部古墳群分布図で分かるように、3号墳を除けば大体70m前後の大形です。更に1, 2号墳は古墳方部に出っ張りのある造出部を持った特徴ある形状です。造出部は幅1.6m、奥行1.2m、高さ3m程度の規模でその内部は礫で仕切られた二層からなっています。ここからは多くの埴輪や大甕、土器、更に14号墳の箱式石棺からは男女2体の人骨が発見されています。

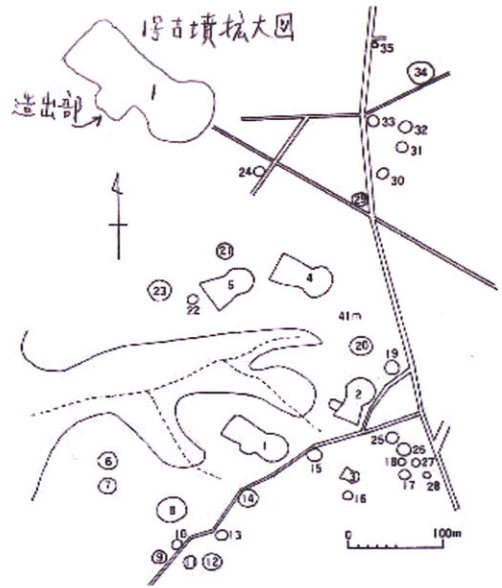


図6 大生西部古墳群分布図

(6) 箱式石棺の人骨

大生西部古墳の発掘は昭和27年9月より35年7月にかけて国学院大学の長瀬磐雄教授を中心に実施され、人骨の発見は西部1号墳と西部14号墳の箱式石棺から発見されました。

【西部1号古墳人骨(図7)】・・・ 熟年男性と小児男子の二体と推察され、熟年男性の頭骨はある程度崩壊しているが脊椎・肋骨・骨盤・大腿骨は保存が良い状態です。大腿骨に接するように小児ではないかと推察される頭蓋骨が破片となって存在して、これは熟年男子の埋葬後、ある時間を置き熟年男子の下肢骨等を移動整理する際に、小児の骨を埋葬したのではないかと推察されています。子舞塚古墳の謂れはこれに因るのでは無いかと思われます。何とか復元された上腕骨の最大長は34cmと推測され骨端は骨幹に比べ大きく且つ頑強である事から男性である事が窺えます。また脊椎骨に変形性関節炎の棘状突起が認められ、多分熟年者(40~50歳)男性骨と推定されます。上腕骨と大腿骨の最大長から人骨測定の独自の式(リー・ピアソン氏の式)にて身長を推定すると約169cmもあり、当時としては大きな男性であったと言えます。

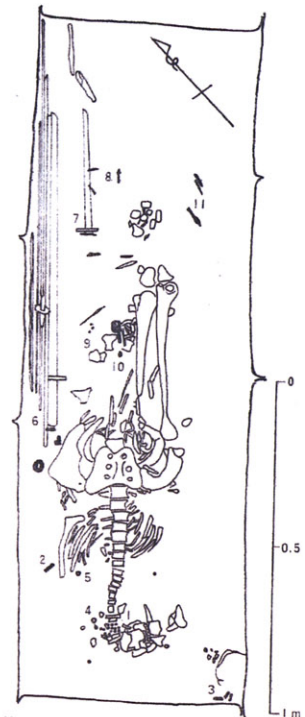


図7 1号古墳石棺内人骨と副葬品→

### 【箱式石棺】

筑波山麓産出の雲母片岩で構成され蓋と石棺底面はそれぞれ長方形板石型5枚で構成され、棺幅60cm、長さ200cm、深さ70cm、棺の四周は黄白色で20cmの粘土で充填され補強されています。

### 【造出部】

図7の古墳の造出部は上層・下層の2層の礫から構成され多量の土師器、須恵器、小型壺、玉器類が出土しました。これらの事例は他の2号墳においても鉄器、玉器、副葬品が造出部から同様に出土している事を思えば、明らかにこの造出部が祭祓場所であった事が立証されます。



図8 大生西部1号墳の箱式石棺

### 【西部14号古墳の人骨】

棺内から人骨男女二体が発見されました。図9の左側は青年女子人骨ですが脳頭骨を除いて保存状態は甚だ不良ですが、脳頭骨は膨隆し女性に特有な形質を示しています。頭骨最大長16.5cm、頭幅13cmの中頭型です。全四肢骨は骨格のみ保存され、その上下両関節端は欠如するので、それらの伸長は推測するしかありませんが、推定される大腿骨長は38cm、脛骨長31cmから身長約148cmと推定されています。一方、右側の保存状態も左側同様、良くありませんが男性成人人骨と推定されます。頭骨は顔面頭骨と脳骨底を欠く不完全な傾向があります。後頭部が円錐状に突出する傾向がある事は、本頭骨が本来長頭型に属する事を物語っています。脳頭骨最大長18cm、推定される頭幅13.5cmです。先の女性骨と同様、四肢骨も骨幹だけで上下両端骨を欠如しますが復元される大腿骨長42cm、脛骨33cmである事から身長158cmと推定されます。

図9の上段は14号古墳の全体像、下段は石棺と人骨です。熟年男子の身長が高い事は、古墳時代の人の身長は縄文時代人や後の歴史時代人に比して大きい事はよく知られた事実であり、この人骨もそれを裏づけています。



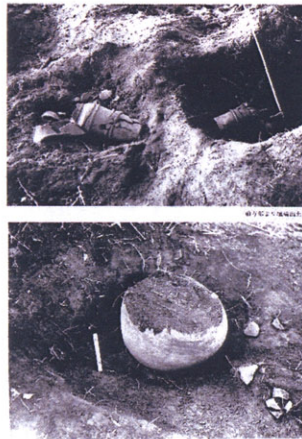
図9 14号古墳全体図(上) 男女二体人骨(下)

(7) 副葬品、出土品

【1号墳造出部及び石棺内鉄器】



【1号墳埴輪と大甕】



【1号墳造出部土器】

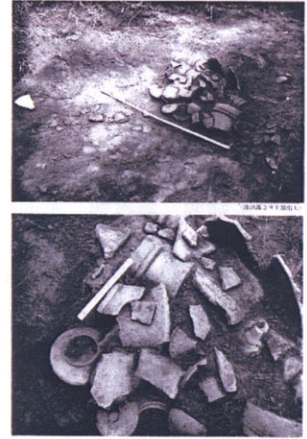


図10 主要出土品

(8) 出土古墳の総括

大生古墳群の調査は昭和27年から同29年迄継続発掘、同35年に遺物調査と第14号墳の発掘と前後5回に亘って行われ、調査日数は80日、延べ人員376人を要し、31万円の費用を費やしました。特記すべきは子子舞塚古墳にみる造出部の組合箱式石棺です。棺外周は粘土で覆われ石棺の蓋石を開けると成人骨一体とすぐ横に並べられた小児一体の人骨の合葬がありました。副葬品も石棺に納められ成人頭部には銀環、銅環、管玉、ガラス、足部には刀子、直刀を認めた。小児骨には頭部に管玉、切手玉等が発見されました。子子舞塚古墳は、オフ氏豪族の誰かの孫が時間をおいて後から埋葬された事が、常陸大生古墳群・茨城県行方郡潮来町教育委員会資料に明確に記されています。

### 13. 鹿嶋吉田神社

御祭神は鹿嶋神社が武甕槌命（タケミカヅチノミコ）、吉田神社が日本武命（ヤマトケリノミコ）です。かつて古高には 国上神社と鹿嶋神社をひとつにした社殿がありました。それが鹿嶋神社だけ今の場所に移され、それぞれ独立した神社になったという珍しい由緒です。鹿嶋神社は大同元年（806年）の創建と極端に古いですが、周辺情報から考えると14世紀頃だった可能性が高そうです。吉田神社の創建も古く年代は不詳となっていますが、元の鎮守地は延方ヶ原（現在延方ウエルシア）で洲崎村の産土神（うぶすながみ）でした。

鹿嶋神社と吉田神社は水戸藩の寺社改革「一村一社」の政策により元禄9年（1696年）現在地新宮に御遷宮、相殿となりました。水戸藩の寺社改革では八幡宮を取り潰して鹿嶋神社や吉田神社、静神社に改めることがありました。元からの名称が鹿嶋神社や吉田神社であれば相殿で残しかったのでしょう。



#### 延方相撲

江戸時代徳島一帯では漁場をめぐる紛争や農耕地の利権論争、耕作権の問題など紛争が絶えませんでした。寛文12年(1672年)7月27日この紛争に対して江戸幕府評定所より「この地は水戸南領に属す」という裁決がありました。村人はこれを喜び合い、寛文13年(1673年)相撲祭を延方村鎮守鹿嶋吉田神社に奉納したことに始まり江戸勧進相撲の格式をもって今日に伝えられています。現在は毎年7月の最終日曜日に開催されています。

この相撲祭は、祭礼の日までの約1ヶ月前から種々の行事が始められ、当番地区においては6月の見届け行事に始まり、神前会議、当番誥家開き、衣装揃え、地取り祭まで地区総がかりで行われます。祭礼の当日、早朝より当番地区から神社までは宮行司、警護、世話人、総代、花相撲と古式ゆかしい行列によってくり出されます。



延方相撲は鹿嶋吉田神社の祭礼として開かれる行事で、300年以上の歴史を数え、県の無形民俗文化財に指定されています。地元ゆかりのある未就学児童が取り組みを行う「花相撲」で始まります。泣き出したり土俵から降りてしまったりドキドキハラハラする取り組みは必見です。その後は神社境内に築かれた土俵で「二番勝負」「一番勝負」「新手二人がかり」「小三番」「大三番」など古式の取り組み48番がとり納められます。

## 1 4. 水郷県民の森

茨城県水郷県民の森は、平成17年（2005年）6月5日に行われた第56回全国植樹祭を開催したあと、2006年4月に一般に開園しました。総面積51.5haにおよび、コナラやクヌギの雑木林のほかシイやカシなどの照葉樹が見られる貴重な平地林となっています。令和5年（2023年）11月1日には全国育樹祭が行われ、秋篠宮殿下御夫妻が、平成17年に平成天皇、皇后両陛下がお手植えされた樹木の枝打ち、追肥等のお手入れをされました。

### (1) ビジターセンター

総合案内施設（ビジターセンター）にはパネルで自然や森林の大切な役目を伝える展示室や、研修室があります。又、年中行事として夏場の昆虫観察や植物観察、山野草展示会、野鳥観察会、季節に応じた各種のイベントがあります。



←ビジター  
センター

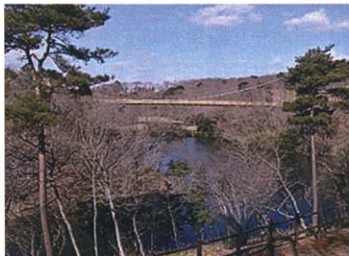
展示室→



### (2) 大膳池、吊橋

11月下旬から3月上旬まで白鳥をはじめ、カルガモ、大鷗等、毎年多くの水鳥や渡り鳥が飛来し、冬の風物詩となっています。

大膳池にかかる長さ85mの吊橋は、大膳池を見下ろす景観がとても良いと好評です。



←大膳池



吊橋→

### (3) 野外活動広場

茨城県としては二度目の全国植樹祭が開催され、記念植樹された場所です。

平成天皇陛下がケヤキ、スタジイ、タブを皇后陛下がヤマザクラ、紅梅、ヤマボウシをお手植えになりました。その時の情景を詠まれた天皇御製の『残りある 平地の林 守らむと 潮来に集い 苗木植ふたり』の歌碑もあります。一面芝の広大な広場には家族連れや子供達の憩いの場でもあります。



野外活動広場

#### (4) 活動体験施設

施設内には、大膳池や大生古墳群を有しており、これらの特徴を活かした四季折々の自然観察会や、森林管理などの体験学習ができます。又、土曜日を主体に草刈り、樹木剪定、吊り橋補修（防錆、塗装）等を実施するボランティア活動等の活動・交流の拠点や、利用者の休憩所としても活用されています。



活動体験施設

#### (5) 大生古墳群

水郷県民の森北東部に位置する、面積8.8haの古墳群で古墳時代中期の築造とされ、前方後円墳・円墳・方墳など110余基の古墳からなり、茨城県では最大規模です。

大生古墳群はオフ一族の奥津城（墓）といわれ、大生神社を中心として大生西部古墳群、大生東部古墳群、カメ森古墳群、田ノ森古墳群に大別されます。

このうち大生神社西側に位置する大生西部古墳群は代表的なもので、子子舞（マゴマイ）塚古墳をはじめ、鹿見塚古墳など20数基からなっています。

子子舞塚古墳命名の謂れは熟年男子の頭骨が埋葬後、長期に亘って崩壊しているのに、隣接している小児の人骨の保存状態が良いことから、孫子にあたと想定されたことによると記されています。子子舞塚古墳は全長71.5mで発掘調査がされており、埴輪や多くの副葬品が発見され、7世紀頃のものとして推定されています。

鹿見（シカミ）塚古墳は大生神社大例祭時、鹿島神宮からの物忌の一団が鹿を連れて訪れるため、この古墳の上から鹿が来るのを見張っていたとのことから鹿見塚古墳の名が付いたとの言い伝えです。



子子舞塚古墳



鹿見塚古墳

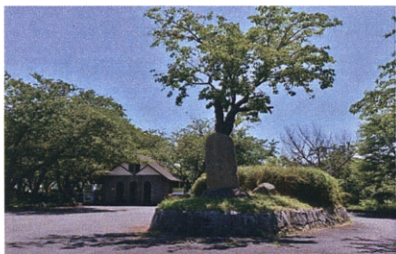
## 15. 権現山公園・三熊野神社・水郷北斎公園

### (1) 権現山公園

「茨城百景」にも選ばれた桜（約250本）とつつじの名所です。

展望台からは北利根川沿いに広がる水郷地帯や霞ヶ浦が一望できます。冬の天気の良い日には右（北）に筑波山と左（西）に富士山を同時に見ることができ、また綺麗な夕陽も見られるビューポイントで、関東の富士見百景にも選定されています。

江戸時代には牛堀河岸のシンボルとして、大きな黒松が航行する舟の目印「山アテ」となっていました。江戸時代後期に活躍した浮世絵師である葛飾北斎の富嶽三十六景「常州牛堀」は、この下の北利根川からの風景を描いたといわれています。



権現山公園入口



公園の桜



展望台

### (2) 三熊野神社

御祭神：事解之男命（コトワケノオノミコト）、速玉男命（ハヤタマオノミコト）

家津御子命（ケツミコノミコト）

三熊野神社は養老2年（718年）下総国印旛富岡の熊野神社の御分霊を東山に迎祀し、三社大権現と尊称。その後東山日吉山王神社から天和4年（1684）三熊野神社を当地に分祀しました。御神木は樹齢350年の雌樹「大銀杏」で目通り4.9m、樹高25m、地上5mから気根が垂れ下がり、8本の枝が伸び古木の風格があります。

5世紀後半から6世紀初頭頃の製作と推定される埴輪武人像が「青龍大権現」として三熊野神社にあります。

幕末期の須田喜源治は柿廬と号し、常総を代表する俳人で三熊野神社の本殿の後ろに柿廬が建てた句碑が4句あります。

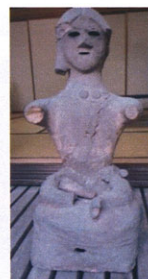
三熊野神社の祭礼は10月8日～10日に催行され、山車が出て賑わいます。



三熊野神社



大銀杏



埴輪武人像

### (3) 水郷北斎公園

北利根川沿いに約1 km続く水郷北斎公園は水辺の公園で見晴らしの良いくつろぎポイントです。葛飾北斎が描いた「常州牛堀」にちなんで名づけられました。

この公園は消波ブロック上に整備されているので、釣りの絶好の場所です。

ウェイクボード、水上スキー等マリンスポーツも楽しめます。毎年夏～秋に開催される水郷潮来花火大会の会場となり、迫力ある花火が間近で見られます。

日本を代表する自転車道「ナショナルサイクルルート」に選定された【つくば霞ヶ浦りんりんロード】も公園内を歩いていて休憩所も近くにあります。

この【つくば霞ヶ浦りんりんロード】休憩所の場所が昭和7年（1932）竣工の旧北利根橋が架かっていた場所で霞ヶ浦よりの現在地に昭和46年（1971）架け替えられるまで、そのほとりのポプラ並木とともに水郷牛堀の玄関として住民や観光客に親しまれていました。

江戸時代以前の物流は河川による舟輸送が主力で牛堀の津も繁栄しました。明治以降近代鉄道輸送路が整備されるとともに減退していきましたが、霞ヶ浦の水運が発達し、蒸気船（通運丸、銚子丸など）が通るようになると牛堀河岸が作られ水産業の間屋や、佃煮の加工業者などで賑わいを取り戻しました。

昭和4年（1929）昭和天皇の閲兵のもと水戸を中心に陸軍特別大演習が行われ、演習後、鹿島神宮に参拝のため土浦海軍航空隊を快速艇で出発。土木事務所（元村役場跡）の棧橋に上陸されました。川岸に「行幸記念」と「聖趾」の石碑が建立され、後に潮来市立図書館南西部に移設されました。



水郷北斎公園



北斎遊学館、オールアバウト蔵



りんりんロード休憩所



昭和46年竣工の北利根橋



葛飾北斎「常州牛堀」

## 16. 長国寺・松原神社・諏訪神社

### (1) 長国寺

文明2年(1470年)に島崎城主第13代島崎長国が創建し、永正年間(1504～21年)に現在地に移転しました。曹洞宗の寺院で山号を大興山と号し、本尊の聖観音立像は市指定文化財になっています。墓地には島崎氏及び家臣の墓石などがあり、樹齢約400年のイヌマキの雄樹は市指定文化財になっています。

また、境内には江戸時代の医師、俳人で松尾芭蕉と親交のあった本間道悦(号:自準亭松江)の墓や天狗党殉難者のリーダーで後に従5位に列せられた前島徳之介の墓標もあります。



長国寺入り口



長国寺本堂



本間道悦墓



前島徳之介墓標



イヌマキの雄樹

### (2) 松原神社

敦賀で処刑された天狗党のために、地元の人が処刑者の墳墓の近くに松原神社を建立しその霊を祀りました。上戸村横須賀出身の吉川忠蔵もその一人で、長男・与平次は父親の霊ばかりでなく、上戸村出身で行動を共にし、敦賀で処刑された者の霊を祀るため横須賀に松原神社の分社を自費で建立しました。与平次が明治31年(1898年)に記した「松原神社詣記」によると、同年県知事や軍関係者など福井県を挙げて、松原神社の大祭が挙行されましたが、招待を受けながら天狗党遺族として出席したのは、「吉川与平次ただ一人」で、主催者の熱烈な歓迎を受けたと記しています。

旧牛堀町域の上戸村では、庄屋家の前島徳之介が天狗党の挙兵に加わった関係で、参加者が特に多いです。天狗党に加わり討死にし、あるいは刑死した者は牛堀村、永山村、堀之内村、茂木村、清水村、島崎村などで70名に達します。



松原神社



石碑

### (3) 諏訪神社

御祭神 建御名方神（タケミナカタノカミ）

諏訪神社にある市指定文化財「応永7年銘 阿弥陀三尊種子板碑」は碑面の上部に二条の線が刻まれ、中央および天蓋の下に阿弥陀三尊の主尊阿弥陀如来の「キリク」左右に観音菩薩の「サ」、勢至菩薩の「サク」の梵字を施してあります。また下に蓮華座を刻しています。（応永7年は1400年）

板碑は主に供養塔として使われる石碑の一種です。板石卒塔婆、板石塔婆とも呼ばれ、中世仏教（主として鎌倉時代中頃から、南北朝、室町時代）に使われ、江戸時代初期には姿を消しています。死者への追善供養や信仰の対象物として造立しました。

基本構造は板状に加工した石材に梵字＝種子（しゅじ）や被供養者名、供養年月日、供養内容を刻んだものです。頭部は二条線が刻まれます。

実際には省略される部位もあります。

神域には天照皇大神、春日大社、金毘羅宮、浅間神社、阿夫利神社、大山石尊などの山岳信仰の参拝記念碑も建立されています。



板碑説明碑



阿弥陀三尊種子板碑

## 17. 慈母観音・万葉歌碑・所家住宅

### (1) 慈母観音

鹿島開発によって干拓事業が行われ「日の出」というニュータウンが誕生しました。その中心に母なる運動の拠点として昭和50年6月に慈母観音菩薩が造られ、当時の奈良薬師寺管主高田好胤和上の手によって入仏開眼された比較的新しいお寺で※『花の寺』ともいわれています。（※春から順にボタン（4月～5月）、アジサイ（6月～7月）、ハス（7月～8月）、ユリ（7月）、皇帝ダリア（11月）が咲きます。）

正式名は奈良薬師寺東関東別院「水雲山潮音寺」という法相宗の寺院です。

ご本尊は慈母観音。また薬師の本尊である薬師如来は無量寿殿に安置しています。

「水雲山潮音寺」は檀家のいない、葬儀はしない、墓地も持たない薬師寺の伝統を守っています。この地区は東日本大震災により液状化の被害が大きく、潮音寺でも16棟あった建物が4棟になってしまい境内では今も修復工事が行われています。境内では親の恩を説いた「父母恩重経」の御写経や仏様のなぞり書き「写仏」などができるほか先祖供養、水子供養や病気平癒の御祈願などが受けられます。

8月13～16日、12月31日に万燈会が行われ境内中央広場で一万燈のろうそくに灯をともし、感謝と祈りを捧げます。

【水雲山潮音寺銅鐘記…橋本登美三郎撰文】

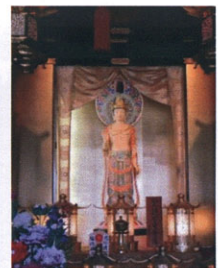
『この地に六十万坪の新しき町づくりをするにあたって、その地の衆人相集いこの新市街地を心のある町としたい念願から、中央に観音堂を建立し水雲山潮音寺と名称した。水雲山の名はこの地よりはるか太平洋を望めば水辺雲につらるるの景観あり、よってこの名称されたるものである。鐘の正面には「みほとけの久遠の鐘の音あまねくば荒振る世とてやはらぎあるべし」と作したのは世の心のざわめきを観世音の鐘の音により、人心の和きを求めんがためである。』



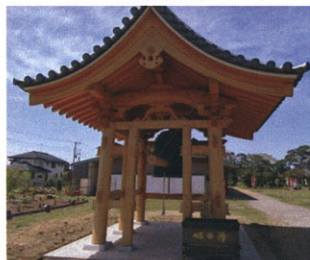
入り口



本堂



御本尊



鐘楼



不動堂



万燈会

## (2) 万葉歌碑

万葉歌碑は慈母観音本堂の裏にある広い庭園の池のほとりにあります。本堂の裏側に廻っていくと池があり、浪逆橋を渡るとすぐ左側に歌碑があります。

「常陸（ひたち）なる浪逆（なさか）の海の玉藻（たまも）こそ引けば絶（た）えすれ何（あ）どか絶えせむ」（巻14-3397）

（大意）常陸の浪逆海の玉藻こそ引けば切れるが、われわれの仲はどうして切れよう。

（作者）未詳。常陸の国の歌



## (3) 旧所家住宅

旧所家住宅は東茨城郡桂村に所在した住宅でしたが、たまたま住宅新築のために解体されたのを機会に当地に移築したものです。所家は江戸時代中期頃村役などを務めた旧家で、この建物も形式手法から見て18世紀中頃の遺構と考えられます。

（吉田松陰が東北遊・水戸訪問の折り、桂村で宿泊した阿野沢の住宅です。）

建物は曲屋状の平面を持つ住宅で、全国的にも珍しいといわれている居住部（広間、座敷、納戸）と土間部を別棟とした分棟型民家の一例として注目されるものです。座敷及び納戸部に矩折（かねおり）の縁を設けたり、土間の正面側に中二階を設け外観を兜屋根とするなどの特徴を持ち、この時代の村役階級の農家としての型式手法を良く保持し、その生活様式による構造的空間への意匠を興味深く残しています。昭和45年（1970年）に茨城県指定有形文化財に指定され、昭和47年（1972年）に現在地に移築されました。



道路側



慈母観音側

## 18. 道の駅いたこ・水郷潮来ソーラー・前川運動公園・水郷潮来バスターミナル

### (1) 道の駅いたこ

平成14年4月にオープンした道の駅です。東関東自動車道の潮来I・Cの近くです。新鮮な朝取り野菜や、虹工房特製のどら焼き「虹どら」、潮来のキャラクターグッズ等様々な商品が並んでいます。グランドゴルフも楽しめ、様々なイベントも開催される子供から大人まで楽しめるスポットです。施設には、道路や観光情報がわかる「情報棟」をはじめ、地元野菜の新鮮市場「伊太郎」や特産品が買える「うるおい館」、トッピングサービスのレストラン「おふくろ亭」等があります。



### (2) 水郷潮来ソーラー

東京ドーム3.8個分の広大な面積を有する水郷潮来ソーラー発電所。その設備容量は15.3MW年間では1470万KWHの電力を発電することが可能です。これは一般家庭4,000世帯分の消費電力に当たります。潮来市や「道の駅いたこ」との協力体制のもと事業を推進しています。道の駅いたこには「展望台」「発電モニター」「施設概要パネル」を設置。水郷潮来ソーラー発電所について、様々な情報を知ることができます。



### (3) 前川運動公園

前川運動公園には多目的広場、サッカー場、野球場、プール等があり市民の健康づくりの場となっています。多くの人々が活用できる設備です。



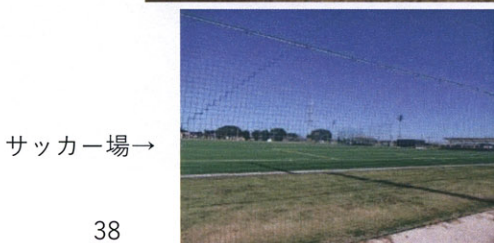
←運動公園  
施設看板



プール→



←野球場



サッカー場→

#### (4) 水郷潮来バスターミナル

平成14年に設置され、東京方面への乗客が多く利用します。

現在は5路線の高速バス（東京駅、成田空港、羽田空港等）と2路線の路線バスが乗り入れしています。特に東京駅発着の「かしま号」は1時間に約3本（時間帯により変動あり）運行されています。

平成29年度から再整備が進められ、令和4年に完了しました。新待合所は従来の約2倍の床面積でリニューアルされ、新たに売店や授乳室等が設置されました。

駐車台数：整備前242台（平成29年度）→395台（令和4年度）に増加



## 19. 浄国寺・西円寺・恵雲寺・天王河岸・自準亭跡

### (1) 浄国寺

浄土宗の寺院で、文禄元年（1592年）の創建です。大永山願入院浄国寺と号します。本尊は阿弥陀如来です。聖観音像は延享元年（1744年）作にて「安産子育て観音」として、水郷観音第三番霊場にもなっています。

潮来8人頭（石田、窪谷、関戸、宮本）家の墓地や、「いはらき」（現「茨城新聞」）を創刊した関戸覚蔵の墓、道路西側には江戸時代の考証学者・教育者・庄屋、宮本茶村の墓等があります。



浄国寺正門



宮本茶村墓

### (2) 西円寺

梅龍山西円寺 浄土真宗大谷派 別名中寺（なかでら）元禄5年（1692年）開基。門の正面に潮来市指定文化財の樹齢400年とも伝えられる大きな銀杏の木があります。銀杏の木の横に小林一茶の句を夏目漱石が書き、句の下に小川芋銭の描いた絵が彫られた『三味線で鳴（しぎ）を立たせる潮来かな』の句碑があります。

小林一茶は文化14年（1817年）5月26日に鹿島詣での後、大船津より舟で潮来に来て俵屋に宿泊して27日に銚子に行っています。

遊女の墓には昭和54年5月に島田三郎氏建立の供養塔「衆生済度遊女の墓」があり、潮来遊郭で苦界に身を沈めた遊女女郎の歴史、由来などを伝える石碑「衆生済度遊女の碑建立の詩」碑もあります。



西円寺本堂



小林一茶句碑



衆生済度遊女の墓

### (3) 恵雲寺

宗派：日蓮宗 山号：徳大山 本尊：釈迦牟尼仏

徳大山恵雲寺と号し元禄4年（1691年）創建の日蓮宗妙光寺旧末寺です。本堂裏手の奥まった所に七面堂というお堂があります。このお堂は内田山にあった延方郷校の最初に建てられた孔子聖堂と言われていています。現在二十三夜尊堂として使われている孔子聖堂が建てられる前にあった聖堂でこの地に移築されました。



山門



七面堂

### (4) 天王河岸・自準亭跡碑

素鷲熊野神社の南に位置し、素鷲神社が天王原から文治4年（1188年）6月に遷座された地で、天王河岸の名前も牛頭天王（素鷲神社）つまり天王様の名によります。今は、潮来祇園祭時に御仮屋を建てる場所として鳥居と常夜灯などがあり、昔の面影が偲ばれます。自準亭は医師で松尾芭蕉とも親交の深い本間道悦が潮来天王河岸の近くに居を構え、「自準亭」と名付けた診療所を開設し診療を行うとともに「読み、書き、そろばん」を中心に日常生活に必要な教育を行いました。

芭蕉は貞享4年（1687年）8月鹿島の根本寺の仏頂禅師の招きで弟子の曾良と宗波を伴い月見を行い、帰路自準亭に逗留し長勝寺にある三吟連句を読んだとされ、この時の紀行文が『鹿島紀行』として知られ、『奥の細道』の2年前のことです。



天王河岸跡



自準亭跡碑

## 20. 硯宮神社・二十三夜尊堂・愛友酒造

### (1) 硯宮神社

硯宮神社の創建は不祥ですが、古くは今宮八幡社と称し応神天皇をお祀りして村社として栄えました。平安時代末期の治承年間（1160～1180年）佐竹氏を討つべく常陸国金砂山（現常陸太田市）に向かう途中、頼朝軍は（頼朝公が居たかは定かではありません。）辻の今宮八幡社に立ち寄り鹿島神宮に参拝する際の戦勝祈願文をしたためました。その際に使用した硯を当社に奉納したと伝えられています。

江戸時代に入り水戸藩2代藩主徳川光圀公がこの故事を聞き、硯を見て「これは中華の産するところの馬蹄石と言い珍重すべき物」と言われ、ご神体として祀るよう命じ、社号を硯宮神社に改めさせたといわれています。

現在の社殿は昭和54年（1979年）の火災で焼失後、昭和56年（1981年）に再建されたもので、拝殿は入母屋、銅板葺、平入、桁間3間、正面1間向拝付。本殿は一間社流造、銅板葺。例祭は毎年7月下旬の土日曜日、御神輿渡御と山車曳き廻しが奉納されます。祭神は応神天皇と硯です。



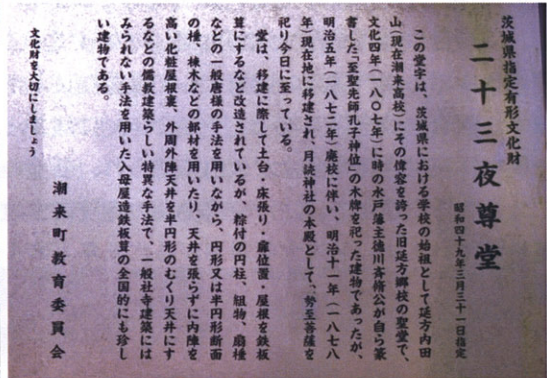
### (2) 二十三夜尊堂

二十三夜尊堂は江戸時代後期の文化年間（1804～1817年）に延方郷校の聖堂（孔子廟）として建てられました。

延方郷校は、この地方の南郡奉行小宮山楓軒の尽力により設立され、元加賀藩士沢田平格の他に久保木幡竜、宮本茶村なども教鞭をとり儒学の他に医術、武術などを教え多くの人材を育成しました。文政2年（1819年）には8代藩主齊脩公直筆の「至聖先師孔子神位」の木碑が安置されました。その後、明治5年（1872年）に廃校となり、聖堂は明治11年（1878年）に現在地に移築され二十三夜尊堂として改修されました。学問の神様孔子を祀るこの聖堂は、光圀公が招いた儒者、朱舜水が制作した模型を元に作られたと言われています。朱舜水は水戸藩に聖堂を建てることを夢見ていましたが叶わず、その模型により後世に建てられたのは、湯島聖堂と延方聖堂だけでした。湯島聖堂は震災、空襲で焼失してしまいましたので、移築後修復されていますがこの聖堂だけが貴重な教育遺産として残っています。屋根には孔子廟には必ずある鬼ぎん頭という神獣が乗っています。

二十三夜尊堂の建物は、入母屋、銅板葺、桁行3間、梁間2間、平入、寺院建築でありながら随所に当時の郷校建築の要素が見られる独特な建物で、明治初期の御堂建築の遺構として貴重なことから昭和49年（1974年）に茨城県指定有形文化財に指定されました。

月読神社としての創建は貞享2年（1685年）、月読命の分霊を勧請したのが始まりとされ、古くから神仏習合し月読命の本地である勢至菩薩が同時に信仰されました。勢至菩薩は二十三夜講の本尊でもあり、周辺住民の講中の拠点として信仰され、特に月読命は女神で勢至菩薩は女性的な印象が強いことから安産、子育て、子授かりに御利益があるとして女性から支持されました。



### (3)愛友酒造

江戸時代から「糶友（こうとも）」の屋号で親しまれた糶屋で文化元年（1804年）の創業です。「愛友」は友を愛し相睦み肝胆相照らすという意味が込められ、社是は「四海皆兄弟」です。水は「大生神社」の湧水と同じ水脈の井戸水を使い、米は潮来産米です。全国新酒鑑評会金賞受賞蔵で酒造見学は年中無休です。



## 2 1. 愛染院根本寺・白鳥の里

### (1) 愛染院根本寺（通称：水原の観音様）

山号：東雲山、院号：愛染院、宗派：真言宗豊山派、本尊：如意輪観世音菩薩、愛染明王。創建は天喜5年（1057年）源義家が前九年合戦に臨む際、この地で暴風に遭い不思議な霊夢を見て、後冷泉天皇から賜った如意輪観世音菩薩像を安置して7日7晩の水行をし武運長久を祈願したところ、満願の日に穏やかに晴れ鹿島に渡れました。

義家は霊地と悟り守護仏に更に深く帰依し、草庵を建立し円通閣主を招いて開山したのが始まりと伝えられています。江戸時代に入ると麻生藩新庄氏の祈願所になり庇護されます。元禄7年（1694年）には宥範和尚により堂宇が再建されました。

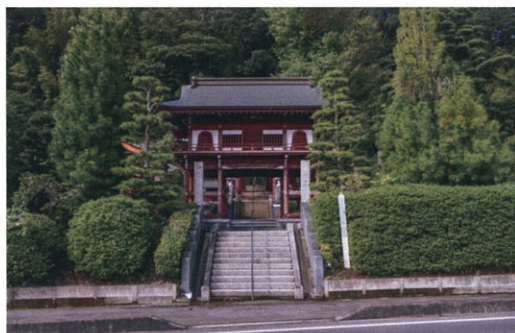
現在の鐘楼門は享保年間（1716～1735年）に建てられた三軒一戸、入母屋、銅板葺、2層目に高欄を廻し外部に表しになっている構造体を、朱色に塗っている建物で江戸時代中期の楼門建築の遺構として貴重なことから、市指定有形文化財に指定されています。観音堂は享保4年（1719年）に建てられ、三間四面、寄棟、銅板葺、正面に一間向拝が付き建物全体が朱色に塗られ、細部の組物や精巧な彫刻が随所に施され、見ごたえのある建物で、江戸時代中期の寺院御堂建築の遺構として市指定有形文化財に指定されています。弘法大師空海が弘仁元年（810年）に彫り込んだとされる、如意輪観世音菩薩像（室町時代制作、檜材、寄木造、像高59.4cm 胎内仏：藤原時代制作、一木造り、像高5.9cm）と鍍金八角釣灯籠（元禄14年（1701年）、福田村伊能三右エ門奉納、高さ45cm、周囲70cm、重さ3.5kg）は共に茨城県指定重要文化財に指定されています。



本堂



境内



鐘楼門



観音堂

## (2) 白鳥の里

北浦「白鳥の里」は白鳥や鴨やユリカモメなどたくさんの水鳥や渡り鳥が飛来し、一年中楽しめる無料の観光スポットとして知られています。

野生の鳥たちを間近で観察できる場所ですので、小さな子供から大人までが鳥たちの雄大な姿に魅了されます。

また、水鳥を至近距離で撮影でき、InstagramなどのSNS映え抜群です。

初めて白鳥が飛来したのは昭和56年度に6羽で、逐年増加し平成25年度に130羽と初めて100羽を越し、令和2年度430羽、令和5年度600羽と数を増やしています。白鳥は日の出とともに目覚め、付近の田園、水田へ餌を求めて飛び立ちます。

その後夕方頃まで採食をし、終わると白鳥の里へ戻ってきます。そのため朝方と夕方が白鳥に会いやすい時間帯となっています。夕方20～30羽の編隊を組んで鳴きながら北浦へ帰っていく白鳥達をよく見かけますが冬の風物詩の一つでもあります。

ご家族連れでの野鳥観察やスケッチ、自然とのふれあいの場としても人気です。

※北浦に飛来する白鳥の種類…コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ

11月下旬から3月上旬まで見られます。



## 2.2. 普門院・地藏河岸の常夜燈

### (1) 普門院

宗派：真言宗豊山派。本尊：船越地藏菩薩

普門院の創建等は判然としませんが、本尊の船越地藏菩薩は縁起によれば建長4年（1252年）真言律宗の高僧忍性（にんしょう）は鹿島神宮に在り、神宮の神木の南枝をもって地藏を刻み、これを永く洲崎に安置すれば、天下泰平、国土安寧となるであろうとの神託を受け一刀三禮の尊像三体を彫刻し、三ヶ所へ安置したといわれています。そのうちの一体が普門院の船越地藏尊です。残り二体は大船津の普渡寺と宮中の普濟寺に安置されたといわれています。

当時この付近の水域は常に渦巻く荒川で、洪水などで海水が逆流するため鰐（鮫）が住みつき「鰐川」とも呼ばれました。渡船が襲われて非常に危険であったため、困った村人が鹿島社へ祈願すると、ある日鹿島社よりお告げがありました。翌日一人の僧が川辺にたたずみ水上に向かい読経すると、にわかに鰐の群れが出現し回りながら海へ流れ去りました。感動して人々が僧の後をつけたところ、普門院の地藏堂へ姿が消えたといわれています。

船越地藏の縁起は、この地域が昔から水運の盛んなところであることを伝えるとともに、そのような環境の中で、社会慈善事業に尽くした忍性の姿を想起させてくれます。普門院地藏堂は天和3年（1683年）に建てられた建物で、元は潮来村にあったものを水戸藩2代藩主徳川光圀公の指示でこの地に移築されたもので、木造平屋建て、桁間3間、梁間3間、寄棟、銅板葺、正面に唐破風の向拝が付いています。

一重屋根の割に高さがあり建物全体が朱色に塗られ欄間部分には四周、中国故事を模したと思われる精巧な彫刻が彫り込まれています。唐破風の欄間部も同様な彫刻が見られ木鼻には獅子が彫り込まれています。内部には本尊である船越地藏菩薩が祀られています。

建築細部の様式は、室町時代末期の特色が見られ、来迎柱の裏面には朱書きで遊女70名の名前があるなど民俗的にも価値がある建物で平成5年（1993年）に潮来市有形文化財に指定されています。山門は切妻、棧瓦葺、一間一戸、薬医門木部朱塗。



薬医門



地藏堂

## (2) 地蔵河岸の常夜燈

造立は文政元年（1818年）8月。200年以上前のもので、現存する市内の常夜燈では最も古いものです。洲崎前の水路は、古来より水難事故が多く、洲崎地蔵堂は信仰の対象として崇拜され、その灯籠は夜間航行上のみならず、人々の生活の上でも重要な役割を果たしました。

昭和25年頃までは、地蔵河岸は前川に面し、東側と南側に30m余りの防波堤がハの字型に整備され、その奥にU字状に50m程の船着き場がありました。

数多の物資を積んだ貨物船や高瀬舟が出入りし、米俵・筵（むしろ）・かます・薪炭等が積み出され、肥料・稲・醤油粕等が荷揚げされ賑わいをみせていたとのこと。

昭和30年代後半、前川の干拓事業が始まるとともに、その役目を終え、変貌した跡地からは当時の面影はなく、この常夜燈が地蔵河岸の名残を僅かに留めています。

（潮来市文化財に指定）

常陸風土記の時代（奈良時代）には玉造にある曾尼駅家（そねのうまや）から大生神社・延方小を結ぶ「古代道」を推定すると、ここは古代からの重要な港であったと推定されます。



## 23. 妙光寺・文殊院

### (1) 妙光寺

宗派：日蓮宗 山号：本圀山 本尊：一塔両尊

創建は文永2年（1265年）鎌倉幕府御家人、横山遠江守勝光と由井但馬守国光の2人が日蓮上人の直弟子中老僧一乗阿闍梨日門上人を招いて開山したのが始まりとされ、常陸国最初の日蓮宗の古刹です。

当初は水原にありましたが鎌倉時代の後期の正応3年（1290年）中道院日正上人が現在地に移し中興しています。

その後一時衰退しましたが江戸時代に入り水戸藩から庇護され客殿、本堂、法華三昧堂が再建されています。現在の本堂は寛永年間（1624～1643年）に再建されたもので入母屋、銅板葺、平入、桁行6間、梁間7間、正面向拝付き。法華三昧堂は江戸時代後期に再建されたもので三間四面、宝形造、瓦葺、正面には徳川光圀公直筆の書が掲げられています。当時の御堂建築の遺構として貴重なことから昭和51年（1976年）に市指定有形文化財になっています。

妙光寺の寺宝には土佐絵二幅対（絵画）、日蓮上人座像（彫刻）、法華三昧堂額（彫刻）、総蒔絵硯箱（工芸品）、総合蒔絵法衣箱（工芸品）、経筒（工芸品）、日蓮上人御真筆（書跡）、日門上人御真筆（書跡）、日蓮上人御消息真筆断（書跡）、徳川光圀書簡1通（書跡）、紺紙金泥法華経1部開結（書跡）、日輪上人御真筆（書跡）などがありそれぞれ市指定文化財になっています。

又、境内にはカヤの大木があり市指定天然記念物になっています。



石柱山門と山門



本堂



法華三昧堂



カヤの木

## (2) 文殊院

創建は不詳ですが、隣接する大生神社の神宮寺だった寺院で大生山神宮寺文殊院と称しています。大生神社は奈良時代に創建した古社で、古代当地を支配したオフ一族と関係が深いとも、鹿島神宮の本宮ともいわれているため、文殊院も格式が高かったことが窺えます。観音堂の本尊である十一面観音菩薩像は行方坂東三十四観音霊場第二十一番札所（御詠歌：おふらかに 浮身のかめと 思わひて 仏のみ法 いつも忘れじ）として信仰を集めています。

境内には阿弥陀堂、観音堂、地蔵堂、の3棟がー列に並んでいて阿弥陀堂内部には寛文5年（1665年）建立の逗子が、観音堂内部には元禄11年（1698年）に建立の宮殿が安置されています。

阿弥陀堂は寛文5年に建てられた桁間3間、梁間3間、宝形造、金属板葺。

観音堂は貞享年間（1684～1688年）に建てられた桁行3間、梁間3間、宝形造、金属板葺。

地蔵堂は江戸時代中期に建てられた桁行1間、梁間1間、宝形造、金属板葺です。

共に江戸時代前期から中期の御堂建築の特徴がある建物として貴重なことから平成5年（1993年）に市指定有形文化財になっています。

現在は牛堀堀之内にある天台宗二本松寺の末寺になっています。



石柱山門と堂宇（左から阿弥陀堂、観音堂、地蔵堂）

## 2.4. 観音寺・国神社・浅間塚古墳

### (1) 観音寺

宗派：真言宗豊山派 山号：瑠璃光山 本尊：聖観世音菩薩

観音寺の創建は大同2年（807年）徳一大師が開山したのが始まりと伝えられています。当初は尾の詰にありましたが観応2年（1351年）に藤原国安により現在地に移され、鰐口と寺領5石を寄進しています。鰐口は青銅製、直径29cm、最大厚9cm「上福寺願主内蔵国安観応三年五月十八日」の銘があり、製作年と寄進者が明確で意匠的にも優れていることから昭和33年（1958年）に県指定重要文化財になっています。薬師堂は弘治3年（1557年）に建てられ寄棟、茅葺、平入、外壁は真壁造り、素木板張、三間四面（一辺約5.5m）、室内には柱がなく屋根垂木は全て梁により支えられ天井は格天井（ごうてんじょう）で中央には狩野元信の筆と伝えられる龍が描かれ、室町時代の御堂建築の遺構として貴重なことから昭和44年（1969年）に県指定有形文化財になっています。又、観音寺には小野小町伝説が残っていて、平安時代、眼病を患った小町が百日間参籠を続け快癒を祈願したところ見事全快し枝垂桜（現在は3代目・別称：小町桜）を寄進したそうです。元観音寺があった尾の詰も小野住（小野小町が住んでいた場所）が由来とも言われています。観音寺境内正面の山門は寛政年間（1789～1802年）に建てられたもので茅葺、妻入り、切妻、四脚門、江戸時代の茅葺山門建築の遺構として貴重なことから市指定有形文化財になっています。



本堂



薬師堂

### (2) 国神社 別名「国神明神」とも呼ばれる

祭神：大己貴命（おおなむちのみこと）（大国主命）、少彦名命（すくなひこなのみこと）

社宝：雄獅子、中獅子、雌獅子

創建は嘉暦元年（1328年）で、古高村（現在の潮来市古高）の国上神社より遷宮したと伝えられています。観応3年（1352年）との説もあります。

ご神体は、元禄3年（1690年）水戸藩主徳川光圀により大洗磯前神社から神儀石3基が分霊されたと伝えられています。社殿は本殿・幣殿・拝殿とも茅葺でしたが、戦後銅板に葺き替えられました。社は明治6年（1873年）社寺改正法に際し、廃社となりましたが、明治10年に氏子達の熱心な復社請願により、明治14年村社として許可された経緯があります。

祭礼は応永2年（1395年）氏子が雄獅子、雌獅子、中獅子の三体を寄進したことが

ら始まり、笛、太鼓、舞手、天狗、おかめ、ひょっとこから組み立てられ奉納されています。獅子舞保存会が代々地区の嫡男によって運営され、この伝承が継承されてきました。この獅子舞は県内では猿島郡境町、久慈郡大子町にだけ伝わる貴重なものです。舞は巫女舞を最初にし、天狗の道割、芝寄せから雌獅子、中獅子、雄獅子の舞、最後に激しく乱舞し、ひょっとこおかめの掛け合いという順で終わります。

元禄3年（1690年）水戸光圀により11月の仲の卯の日を新嘗祭（にいなめさい）とし、獅子舞を奉納するように定められたと伝えられています。

その後、獅子舞は太平洋戦争や戦後の混乱期を乗り越えて続けられ、昭和43年には、県の無形民俗文化財に指定されました。しかし、現在は新型コロナの影響や、楽員不足で獅子舞やひょっとこおかめの掛け合い、巫女舞などは休止せざるを得なくなっています。現在は毎年11月23日に五穀豊穡を願って奉納される新嘗祭と、元旦の歳旦祭（さいたんさい）のみとなっています。



国神神社本殿



獅子舞

### (3) 浅間塚古墳

常陸利根川を望む台地縁辺にある墳丘全長84m、後円部径48m、高さ7.5m、前方部幅25m、高さ4.5mの前方後円墳です。墳丘の北東側に幅10mの周溝がありますが、西側は国道51号線のため一部削平されています。

埴輪等の外部施設は確認されていませんが、前期古墳の墳形を良く示しており、4世紀末から5世紀初めの築造と推定され、霞ヶ浦、北浦周辺部で最古の前方後円墳です。前方後円墳の後円部の頂部に地元で「浅間様」と呼ばれる、浅間古墳神社が祀られていて後円部の参道の途中には鳥居が立っています。



国道51号線からの全景



浅間古墳神社

## 25. 水郷トンボ公園・市立ポートセンターあめんぼ

### (1) 水郷トンボ公園

潮来市福島にある公園。霞ヶ浦下流の外浪逆浦（そとなさかうら）の河川敷に位置し、水生植物や水生生物のビオトープ※が設置されています。アサザやオニバスなどの植物や、淡水魚、カエル、昆虫、野鳥などの様々な生物を観察できます。

アサザ池、オニバス池など5つの池が江間と呼ばれる水路で外浪逆浦とつながっているビオトープです。珍しいヨシアキトンボやアキアカネなどのトンボをはじめ、この地方では絶滅に瀕している水草のアサザなど貴重な水生植物と出会えます。

※ビオトープとは

安定した生活環境をもった「動植物の生息空間」のこと。ドイツ語。ある限られた地域に由来そこにあった自然風景を復元すること。



水郷トンボ公園



トンボ公園池

### (2) 市立ポートセンターあめんぼ

市立ポートセンターあめんぼは茨城県内で唯一ボート競技ができる施設です。

ボートコースは下流18kmに常陸川水門があり、国土交通省霞ヶ浦河川事務所により水位が管理されており、水流はほぼありません。温暖な気候と四季を通じて安定した水面は競技コースとして高い評価を得ています。

茨城国体ではボート、トライアスロン、オープンウォータースイミングの会場となったほか、昭和54年から「水郷潮来シティレガッタ大会」を開催しており、市内外の小学生から大人まで多くの方々が参加し、ボート競技を楽しんでいます。

- ・1000mB級公認コース（競漕レーン13.5m×5、回漕レーン16.5m×2）
- ・2000m計画中（競漕レーン13.5m×5、回漕レーン16.5m×2）
- ・練習水域500m



ポートセンター



ポートセンター前北利根川

## 26. 長山（永山）城跡・日吉山王神社・金刀比羅神社・かすみの郷公園

### (1) 長山（永山）城跡

長山城は、行方忠幹六世の孫で小高幹平の次子知幹が、現在の永山の地を領し築城したことに始まります。鎌倉時代の後期で知幹が長山氏の祖となりました。

10代幹綱の時、大永2年（1522年）に隣接する島崎利幹によって攻められ落城するまで二百数十年続きました。

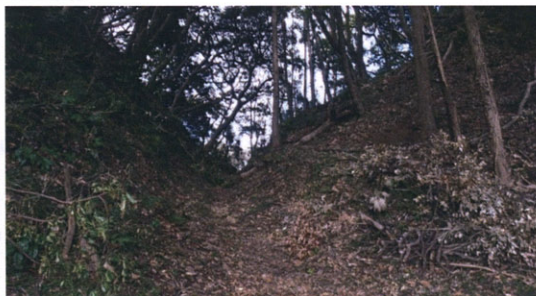
本丸跡・二の丸跡・土塁跡・壕跡・櫓形跡等の遺構が見事に残され、令和4年に潮来市指定文化財になりました。東西約180m、南北約50m（本丸、二の丸）の小さな城に大型の城並みの諸施設を取り入れた中世城館遺構として貴重な存在です。

現在も城跡の周辺には城山、根古屋、門前、寺台、弓内、浜弓場等の関係地名を多く残すとともに落城等に際しての言い伝えも語り継がれています。

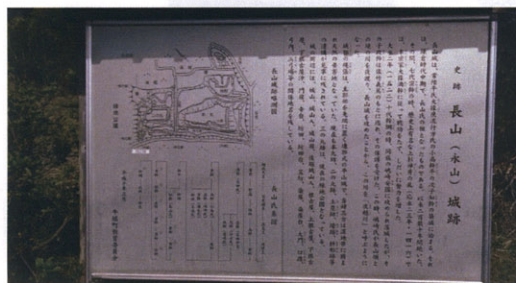
(広報いたこvol. 263 2023年2月号より)



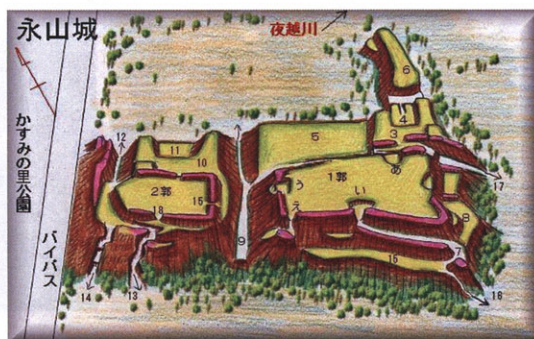
石碑と碑文



壕跡



説明版



長山城跡絵図

### (2) 日吉山王神社

祭神：大山咋命（おおやまくいのみこと）

創建年代は不祥ですが、和銅6年（713年）に編纂された『常陸風土記』に「香澄の里あり東の山に社あり」と記されているのが永山の日吉山王神社です。

鎌倉時代中期桓武平氏の流れをくむ長山知幹が永山（長山）に築城するにあたり、牛堀北西部境より現在の地に移転され、その後長山城主が10代氏神として尊崇した神社とされています。以前は「日吉」「山王」「三熊」三社の神社が相殿であり、大山守の須田氏が牛堀に移転する時に三熊神社を割譲したので、現在は日吉山王神社と三熊野神社の二社となっています。

この神社境内全域は県の緑地環境保全地域及び市の天然記念物（日吉山王神社の森）に指定され、大般若経は市の有形文化財（日吉山王神社の大般若経）に指定されています。



拝殿



本殿

### (3) 金刀比羅神社

祭神：大物主命、金山彦命

創立年代不詳、安永7年（1778年）春南総の村人、疫病除けの小太刀（豊年神）を持って村々を巡り、新島村三島（現香取市三島）より香澄村に担ぎ込まれ鎮座した処「讚州金刀比羅大神」と神告あり、参詣人次第に増加し海上安全、豊漁に靈驗著しくこれを聞いて鹿島灘の漁民をはじめ、遠く銚子方面や霞ヶ浦沿岸から群集しました。当社は霞ヶ浦を一望できる絶景の高地（海拔27m）にあり、霞ヶ浦と関わりが深く周辺の人々に広く信仰の対象でありました。



拝殿



本殿

### (4) かすみの郷公園

周辺を田園に囲まれた高台に約10ヘクタールの森がひろがっています。

園内は芝生のサッカー場と野球場（2面）のほか、「レクリエーションの森」や「体験の森」、「収穫の森」など7つのテーマにわかれており、遊歩道で結ばれています。





